明治三十年五月二十日發行

女鑑

第百三拾三號

東京國光社

女鑑第百三拾三號

目録

淳和天皇の皇后



女子と慈善と

憫憐なるを見ては慈惠の心起り、窮乏なるを見ては救恤の念發するは、人々總てが保てる天性にして、決して、教化の力に因りて始めて得たるにはあらず。然れども、教育と感化との有無に依りては、或は、此の心を養成し、或は、その幾分を滅減するは勿論なれば、吾人は、此の天性に加ふるに教化を以てし、益々完美に域に達せんことを庶幾して止まざるなり。幸に吾人は、明治の昭代に生れて、洽く大平の德化に浴す。然れども、人は、時に、幸あり、不幸あり、今日榮華を極はむるものも、明日は門前に食を乞ひ、今日衣食に窮するものも、明日は高樓大厦に住み、有爲轉變、實に計るべからず。されば、富めるものは、貧しきを惠み、余りあるものは、足らざるを補ひ、相互に扶助して世を渉るこそ、すなはち人た

るものの本分なれ。而して、殊に、女子は、自ら、男子と、其の性を異にする處ありて、其の情愛も一層深く、其の志慮も亦小し、從て、物に感動し易くして、憫憐なるを聞き、窮困なるを見ては、直ちに之に同情を表すること、男子より猶切なり。是、自然に具はれる女德にして、又、最も尙ふべき所なり。

されど、世の女子等は、男子よりも、能く、貧しきを惠み、不幸を扶けて、其の天賦の良性に背かざるか。此の點に於て、吾人は疑なき能はず。此、女子は、小心にして、物に感動し易ければ、一方に、慈惠の心深きと同時に、他方には、自衛のみちに汲々として、他を顧るのいとまなく、餘財貯蓄は幾何あらんも、其は、己が不時の災に備へんことをのみ思ひて、世の貧困者を惠み、罹災者を助くることを考へざる傾向あるによらんか。

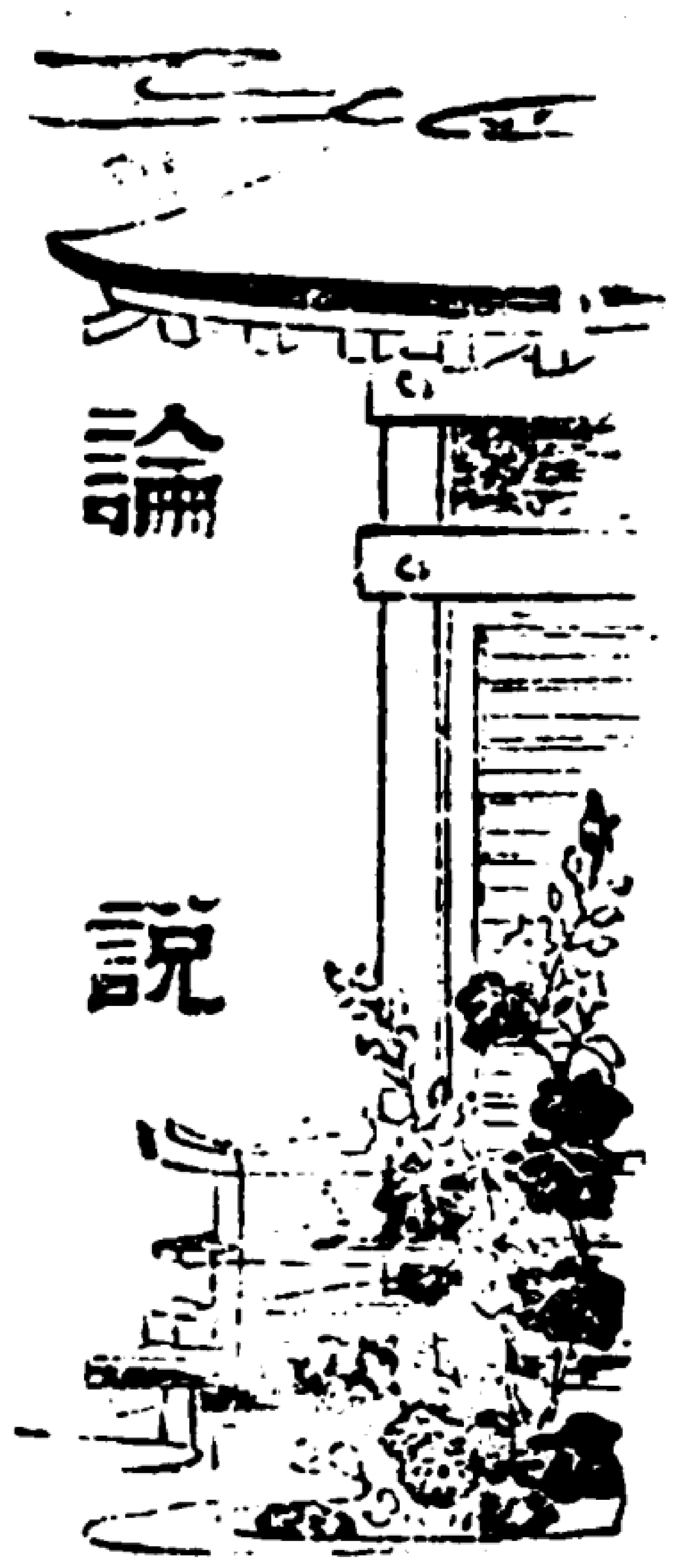
自衛の畜財、亦、無かるべからずと雖、能く其の程を知り、分を考へざれば、遂に貪りて飽くことを知らず、吝嗇の譏も亦免かれざるべし。深く自ら注意して、此の弊に陷らざらんことを務むべきなり。

抑、女子が、人の妻となり母となりては、能くその家政を治むるに在り。而して、いやしくも冗費は之を省き、餘裕あらば之を貯へて以て不慮に備へ、窮困を賑はし。尙、此の心を以て夫を扶け、子を養はゞ、妻たり、母たるの德、益々その光彩を添へ、一國としては、能く女子の師表となり。一家としては、永く子孫の繁榮を至す。豈、又、樂しきことならずや。古人曰へることあり。

積善の家には餘慶あり。と。

又、慈善の心は、宗教の力に依りて、その幾分を養成することあれども、そは、所謂、已の成せる罪業を滅ぼさん爲といひ、或は、天の惠みに報ゆるといふ心より發するものなれば、之を宗教的の慈善とやいはん。此の宗教的慈善も、眞の慈善も、その結果は、一なりといへども、その心意、その德、大に異なりたる處あり。則、一は、只に之を已の爲にするといふに起り、一は、他を憐れと思ふ赤心より發するものなればなり。故に、吾人は、世の婦女子に望むに、前者より、寧、後者ならんことを以てす。況んや、宗教によりては、甚しき弊害ありて、些少慈善

の徳を養ふより、遙に大なる迷信に陥ることあれば、先づ、近づかざる方安全ならんか、宜しく赤心より發する眞正の慈惠心を喚起し、祖先より受け得たる、最も美はしき天性に背かざらん樣心懸、子孫をして、尚、一層此の美徳を備へしむること、女子が世に處する義務の、最肝要なる一なるへし。



婦人の地位

齋木文夫

女子の教育は、一時大に隆盛を極め、何れの女學校も空席を存するなく、學校の數も一兩、其の多きを加へ、洋服を纒ひ、洋語を話し、滔々たる女學生は、一に英國、佛國の令孃たる觀ありたることとありき。

然れども、「因果は回る水車」歐化主義反動の結果は、女子教育に大恐慌を來し、女子

教育は無用なり、弊害多しなど、勝を制せし反對の氣焔も今や消えて、霜枯の草木再び春に遇ひたらん如く、女子大學の設立さへ企つる者あるに至れり。然れども、「念には念を入れ」ざるべからず。婦人の教育を論述せんには、婦人の地位を確定せんこと最も必要なる者なれど、吾人は、今、左に考察の結果を公にして、大方博雅の士の是正を乞はんと欲するなり。

習慣の指示する所に依れど、女子の社會上に占むる位置、甚だ高からざるは、洋の東西を問ふことなし。米國は女子教育最も盛にして、女權最も發達し、男子は婦人の前に在りて喫煙だも憚れるさまなるに、尙、政權を左右し、女子は却て國會議員たる能はず。國務大臣たる能はず、英國に於いても、人の婦たる者をカバーチユーアと稱し、殆ど我が國の內儀內室の語と相類似せり。

白耳義は普通選擧權を確認し、投票を以て各人の義務となせしかども、尙「妻の所有權は夫の分に併算す」との一條目を存せり。

日耳曼にては、夫の婦に對する權利をムンドと稱し、之を保護するの義昭々たり。ローマにては、夫の權をマヌスと云ふ、手と云ふ義にて、婦を壓制するより生じたる者なり。以て西洋諸國に於ける婦人の地位如何を推知し得べし。殊に甚しきは、英國は文

明を以て誇張しながら、婦を以て夫の財産となせる風習、今に尚現存せる地方あり。我が國に於ける婦人の地位は、古來確定不動、未だ曾て錯亂せしことあらず。伊奘諾尊は伊奘冊尊に、吾は男子なり、理當に先つべし、如何ぞ婦人にして反て先つや、事既に不祥なりと。宣へりしことは、古史の傳ふる所にして、此の敎義は、國の姿の一に數ふべき者なり。物移り、星變り、爾來幾裘葛、王朝に至るに及びても、婦人は常に男子に先つことなく、終始其の保護の下に立てり。されど、大寶令は、男子専貢の制を採り、口分田の數、男は二反にして、女は一反二十歩なりしに、調庸は、女子に課することなかりき。尤も、三代實錄に載せたる奏議に、田地の配分、男のみに限り、女に及ばさることあるを見れど、或は唐山の雲霧に掩はれたるにはあらさるかの慊なきにあらず。其の他、長曾我部氏の家訓に、男留守のとき、神佛物詣見物一切停止のこと。とも、あるより、推考せど、男女、各、其地位の不同たりしは明かなり。

然れとも、吾人は、之を以て男女の同權不同權を唱導する者にあらず。只、地位不同たりと云ふのみ。男子には、女子より優れる所あり、女子にも、亦、男子の及び難き長所あり。縫織の道は女子に問ふへく、稼穡の務は農夫に尋ぬべきが如く、人には能不能存する者なれど、男子剛なりとも獨り立つ能はず、女子柔なりとも必すしも欠げた

りとせず。苟も、男女其の本分を遂げんと欲せば、之を一方にのみ望むべからず。然るに、世には輕薄なる學者ありて、女子も、男子と共に智力の競爭をなさしめ、同一の職業を執らしめんとする者なきにあらず。さらば、試に問はん、兵戈劍戟のことは、温和柔順を天にせる婦女子のよくし得べき所なるか。育兒家政の微妙繁雜なる務は、剛放粗大なる男子の完ふし得べき任務なるかと、之を肯定する者幾何かある。女子の心性は、甚だ巧智敏捷にして、慧眼を以て世に處し、夫の職業を扶け、貞淑を以て心となし、一家の幸福なる繁榮を計圖し、用意綿密、よく呶々言ふ能はざる嬰兒の顔面を讀み得て、之に適應するの處置を爲すは、男子の及ばざる所なり。縫織調理の繁を忍び、微を見、細を察し、能く家政の泯亂を防禦し得るは、男子の及ばざる所なり。「男やもめに蛆が湧く」とは、男子が家政の燒理不得手なることを明にするにはあらざるか。且、夫、試に思へ、戰陣勇を揮ふは快たること論なし。艨艟突撃は勇たること疑なし。此等の壯夫は誰が生み、誰か養成せしぞ、忠孝壯烈なる楠正行は誰が手に養成せられしか、活眼達識なる吉田松陰は誰の感化を受けたるか、女子の本務を辨へざる勾當の内侍は、義貞をして千歳の恨を殘さしめたるにはあらざるか。

身体の構造より論ずるも、心性の性質より考ふるも、女子の忠孝節義は、男子と同一

の方途に向つて進むべき者にあらず。故に、ローマ建國の始に當つてや、婦女子は、曾て戰陣に臨まざるも、其の精神憂國の一點に傾注して兒童を育養せしより、國の元氣愈熾にして、戰へば捷ち、攻むれば取り、殆ど歐亞三洲を併呑せんとしたりき。其後、社會は華奢に流れ、人情は輕薄に傾き、終に支離滅裂、如何ともする能はざるに至れり。

婦人の社會に對する勢力は漠大なり。國家を盛ならしむるも衰へしむるも、大に婦人の力に關係せり。然れども、是只潜勢力のみ、婦人の勢力は顯にあらずして、隱に在り。之れ男子と、女子と、社會に對するの地位を異にする所なり。教育は如何に進歩するも、風俗は如何に革まるも、此の原則は曾て變易することなかるべし。若も、此の前提を置かずして、女子教育を呶々し、江馬細香の如き女流を養成する者あらば、國家を賊害するの鴆毒なりと論せざるべからず。

女子教育一斑（四十一）

三輪田眞佐子

第三　色彩の辨識につきて。　本來、色彩は、光線の作用に基ぐものなり。凡そ、太陽の光線に七色あり。こが、天地間に存在する千種萬別の物體に映ずれば、その性質

に從ひて、ある色を吸沒し、其の殘餘の色より、種々の現象をなすものなり。さればにや、説をなすものあり。曰く、色は光線の作用に過ぎず、故に、昔し世をして常夜の暗ならしめんには、全く、美なく醜なくして、空なるべきものを、これに眼の奪はるゝ人こそはかなけれ。と、こは、いみじきひがごとなり。

見よ、人の甘味として食ひ、以て生命を保存するところの食品も、分拆すれば、若干の元素となるべし。さて、等しく、元素なりとて、誰か岩石を嚙り、土芥を食ひて、壽命を全くせん。色は光線と視覺の關係に過ぎざれば、萬物各章をなす所以のものは、造化の巧妙なる德に外ならずかし。

白居易の句に、池水溶々藍染水花光焰々火燒春。と、實に天地四時の光景は、色彩の美にあらざるはなし。小町が(花のいろはうつりにけりないたづらにわが身世に經るながめせしまに)及び、淸正が(むら／＼の錦とぞ見るさほ山のはゝそのもみぢ霧たゝぬまは)の歌さへ、共に色の美をなす例とも見るに足るべし。

人は、生れながら、多少の審美力を有つものあらんも、淺薄なる心の人は、色彩の皮相を觀て、是非し、高尙なる心の人は、色彩の內容を視て識別すると。將た、これを單に光線の作用なりと、形而下的に觀ると。全く造化の秘義なりと、形而上的に視る

とは、全く雲泥の差を生ずるならん。
凡そ、物の美を洞察するには、これに同情を起すにあらざれど、會得すること難し。然るに、美に同情を起さんとならば、心既に美ならざるべからず。若、糞土の如き精神を以て美を評せんか、さながら聾者の音聲を議せんがごとし。されど、女子の美育に於いては、色彩を辨識する心を養ふこと肝要なり。おもふに、色彩は、先づ、視力に訴ふべけれど、おのづから視力の源なる才識を發達せしめざるべからず。明鏡妍媸をかゞみ、權衡輕重を擬し、尺度長短を測るごとく、美想の人こそ、美をしるなれ。次に色彩を鑑識するに、熟練せんため、畫學、刺繍などを修むべし。若、色彩の美を辨識するに至らんか、これを生涯の人事に應用すべし。色の濃淡は更なり。色と色との關係、及び色の撰擇などは、畫學、あるは刺繍などによりて、差別する智識を養ふべし。さりとて、學問の智識を忽にせんかとても、美の蘊奥を極むる能はざらんかし。
茲に忘るべからざるものあり、そは、女子普通の教育に於いては、畫學、刺繍などは、技術を卓絶せしめんとつとむるよりも、審美力を養はんことこそ、肝要なれ、如何となれど、技術に熟達するは、固より望むべきことならんも、卒業の後、人の妻たり、

婦たるあかつきは、家務繁忙のため、筆を採るは稀なる女子多しぞかや。これに反して、幾分たりとも、審美力を養はんには、朝な夕な、生活の趣味に於いて、活用すること少なからざるべし。すなはち、これを衣服に應用せんか、勞せずして優美の風体となるべし。たとへば、物理學上の實例ならんも、白地の衣服は、光線の反射より、人体を大なる形に見せしむるものなれば、倭小の婦人これを着んには、稍大に見ゆべく、肥大の婦人これを用ゐんには、ます〳〵肥大と見ゆるが如し。その他、縞がら、上衣、下裳の色合も、審美力の効を假らざるべからず。亦家具一切の裝飾につきては、色彩の判別力如何によりて、美醜の懸隔を釀さん。

かゝる理なれば、女子たるものに、色彩の美を識別する智識なくば、人類社會の外形を、高尚優雅ならしむる能はざるのみかは、自然人心にも影響して、各卑俗の趣味を嗜むに至らん、あはれ心してよ。

天地の中に萬物あり。萬物の內、人ばかりたふとき物なし。かるが故に、萬物の靈といふ。其の靈たる故に、心に五性あり、身に五倫あり、目に五色をわかち、口に五味をおぼへ、耳に五音をわきまへ、鼻に五臭をしる。鳥けだものは、此のあまたのこと、一もなし。人となりて、かゝるたふとき身を得たること、誠に、天地の間の大なる幸を得たるなり。しかるに、人となれる道を知らず、禽獸にちかくして、空しく此の世を過し、人と生れたる身を徒らになすこと、くやしからずや。

（益軒）



淳和天皇の皇后

塩井ふく子

淳和のみかどの御代、天長八年といふに、ひでりうちつゞき、田畠みな龜裂して、木も枯れ、草もしぼみ、鳥獸、蟲魚多く失せはてし、餓莩野に滿ち、民皆菜色を帶びていたくうれひかなしみ、今はたゞ枯死するを待つばかりなるに、天皇いたくなげきおぼしめして、天津神、國津神、山津神、神てふ神にみてぐらを奉り、ぬさを手向け、さま〴〵の御祈り事どもとり行はれ玉ひたれど、絶えてその甲斐なかりけれど、天皇は、ます〳〵うれひ玉ひて、朕、何の政の足らはぬ處かあるとて、夙夜御心をくだかせ玉ふに、皇后正子君、天皇に奏し玉ふやう、陛下誠に天をつぎ、祖宗に承け玉ひしより、國をおぼし、民をおぼし、日來御政に御憂勤怠らせ玉はねど、此度の天戒、あながちに君をとがめ玉ふわざとも覺え候はず。されど、なほ、御身をひき玉ひて、慈和と恭儉とをいよ〳〵深くなし玉はゞ、天津神必ずあはれみ玉はん。されどまづ禁獄

の罪をゆるし、作役の人工をやすめさせ玉へと奏せられしに、天皇も道理とやればしたまひけん、皇后のすゝめに従ひ、明日、即ち命じて、進獻をとゞめさせ、饑窮のものを賑はし、死を宥め、五刑を降し、責を止めて、三農を寛にし、心齋を行はせ玉ふなど大御心をつくさせたまふに、民みないたく君の德に感じて、うれしきあまりに涙をとゞめもあへず、みな君をかなしみ奉れど、君はいよ〳〵民をればし、和氣天地にみち〳〵て、君民互みに悲しみあふ涙には、いかでか、天津神の感せさせ玉はざらむ遂に天つ大空一面にかきくもり、え堪へぬ涙雲の御袖より注ぎ玉ひけるに、國土うるはひて、萬物初めて春を知り、木は葉を起し、草は萌え出で、野山初めて青く、百穀今こそ穗を生じ、鳥も初めて歌ひ、虫も初めてなき、海には潮みなぎり、千介萬鱗同日に活き魚はねをり、龜は舞ひ、民は貴賤の分ちなく腹つゞみをうつてよろこびけるに天皇の大御心も初めて安く、皇后もまた甲斐ある心地せられて、國中擧つて萬歳を稱ふる聲、天を動かすばかりなり。かくて、天皇ふかく之にめで玉ひて、皇后をいとあさからず愛敬し玉ひけるとかや。

此の皇后は嵯峨天皇の第二の御女にて、正子内親王と稱へさせ給ひぬ。御かたちもすぐれ、御心ばへもめでたくましまして、萬づ禮度に叶はせれらしかば御父御門も、御母

皇后もいといたく御鐘愛遊ばされけるとかや。皇后とならせ給ふに至りてもよく内殿を治めさせ給ひしかば、中外みな之に則り奉りけり。廢太子恒貞親王、恒統親王、及ひ基貞親王は、この皇后の御腹なり。

天長九年、皇后、雲林寺に御啓ましまして、農業を御らんぜられ耕種の男女に物を賜ひ、その辛苦をとはせ給ひしに、人民みな難有き思ひをなして、いよ〳〵農業をはげみけり。

十年、帝　御位を　仁明天皇にゆづらせ給ひ、　上皇とならせ給ひしより、皇后もまたその號を止め給ひて、官屬を廢されけり。ほどなく、上皇崩ぜられしを、皇后いたくれはしなげかせ給ひて、御容貌も毀れ、骨もとみに高うならせ給ひけるが、遂に世をれはしたゝれ、御かざりをもおろさせ給ひて、尼公とならせ給ひけり。齊衡二年といふに、文德帝尊ひで、大皇太后と仰がせ給ひぬ。貞觀二年といふに、大齋會を淳和のだいに設けさせ給ひ、諸寺の名僧を延き、法華經を講じ、金錢、米、醲酒、鹽、味噌等を僧俗の男女に施されける事無慮三萬人ぞかりなりけりとぞ。

后、菩薩戒を延暦寺の座主圓仁に受けさせられ、法名を良祚と稱へ奉られけるとぞ。

元慶三年三月廿三日疾篤くならせられしほど、左右のものにの給ふやう、天長の帝の

かくれさせまし丶折り、御遺命をたれて、火葬にさせ、山陵をも置かせ給はず、園廟の陪すべきものもあらず、されど吾も瞑目の日には、棺は朽ちし材を用ゐ、嵯峨山に藏め、冢守などをも置かで、たゞ一に先後太上天皇の制の如くせよと仰せ給ふ。その御言葉終りて、やがて崩れましけり。御年七十一、皇后誠に御仁心深く、いたく物をあはれみ、救はせ給ひ、諸方にすてたる子、或は孤子をみな收められて、乳母に給して養育せさせ、御親らの封戸五分の二を割きて、その費にあてさせ給ひける御仁心のほど、聞き奉るも、白栲の袖ひづるばかりなり。

また貞觀中嵯峨山のふるき宮居をこぼちて精舍となし、清和天皇に請ひて、額を賜ひ大覺寺と曰ふ。その側に別に舍を建てられ、僧尼の病あるものを入れて療養せしめ給ふ、名づけて濟治院と曰はれしとぞ。萬づかくの如く、御身が榮をうすくし給ひて、人民をめぐみいつくしまれ給ひしありがたき御仁心のほど、いやしきもの丶筆にのせ奉らんは、ゆ丶しともゆ丶し。

吉岡宗歡の妻林氏　　諸富貞治

忠臣、孝子、義夫、節婦の操は、變わる時にあらはる丶ものなりかし。昔、豐後の大

友氏は、源頼朝公の庶子、大友左近將監能直公より廿一代四百年間、豐前豐後の守護職として、飛ぶ鳥も落さんばかりの勢ありき。その譜代の家臣に、豐後鶴崎の城主、吉岡宗歡といふ人ありて、智勇世にすぐれたる名將なりしが、その妻は、林左京亮といふ人の女にて、容姿人にすぐれ、性質至りて温和なりといへども、また、時に臨みては、活潑、勇敢なる女丈夫にて、且つ、夙に貞節の譽れを恣にせし人なりき。

思ふにまかせぬは世の中のならひにて、林氏が、まだ年わかきほどに、夫宗歡は、一子統益を殘して此世の外の人となりにけり。林氏は、夫に後れて後は、飾りを下して尼となり、名を妙林とあらためて、夫のわすれがたみの統益を敎育して、下は士卒をめぐみやしなひ、上は、大友氏の爲に、夫にかはりて、鶴崎城を守り、只ら統益の成長をまちたりしが、統益は、母の手にて成長せしが、これも、父に劣らず、智勇兼ね備りて、大友氏の股肱の名將とはなりけり。

今より三四百年の昔は、足利氏の末より、織田、豐臣の世にかけて、群雄四方に據り、天下は麻の如くみだれて、甲これを乙たふれ、弱きものゝ肉は强きものゝ食となりて、戰爭やむ時なかりき。この頃、大友瑞峯公義鎭は、後に入道して宗麟と稱して、正四位下、九州探題に補せられ、豐前豐後より、筑前筑後までも領したりしが、同じこ

る薩摩の島津家久も、また、勢甚だつよかりしかば、天正二年、宗麟公は、兵をいだして、島津氏と、大いに耳川に戰ひて敗れ歸りしが、その後、天正十四年、島津家久、數萬の兵を率て、豐後に入り、大友氏の諸城塞を攻む。この時、吉岡統益は、一族郎等を召しつれて、大友宗麟公の丹生島の城にありしを、その虚をうかゞひて、薩摩の將、白濱周防守、野村備中守、伊集院美濃守の三將、三千余人をもて、鶴崎城にむかふとき、林氏は、留守居してありしが、急に、自ら經營して、城壁を修理し、城外に濠を掘りて藥鉉堀となし、柵を設けて、柵外に穽をうがち、城壁の裏には、席、或は板をかさねて敵の矢石を避くる備をなし、また、兵糧を運ばしめて、鶴崎、高田の士民をあつめて、かたく守りたりしが、その年、十一月十二日の、東の空の漸く白むころ、敵は名に負ふ薩摩隼人のはやり雄が、雲霞の如くむらがりて、鬨をつくりて城壁にせめよせしが、穽に陥りて死ぬるもの數を知らず。城兵は、更に恐るる氣色もなく、頻りに小銃をはなちてこれを拒ぐ。林氏は、緋威の鎧に身をかため、白柄の薙刀提げて、甲斐々々しくもいでたち、侍女を從へ、自ら城中を巡視して警戒をさ〳〵怠らず。また冬の夜さむに、士卒の身を思ひやりて、酒飯を與へ、自ら飯櫃を携へて士卒に勸め、厚く犒ひはげましゝかば、士卒はよろこびいさみて、時々出でゝ薩軍を破り、大小十

六戰して、敵を殺したる事頗る多かりしが、城兵の死傷は、僅に十余人なりけれど、流石の隼人もせめあぐみて、人を使して降參をすゝむる事度々なりき、或時、二三の士、林氏をいさめていふやう、我兵は、よく戰ひて、敵に勝つこと度々なりしかども、敵兵はなほ多くして日々に加はる。我は、僅の羸兵をもて孤城を守ることとなれど、終に勝つこと能はざらん、夫人の忠節は既に世に顯はる、今、敵の勸めを容れて降るとも、誰か譏るものあらんといひしかど、林氏怒りて、汝等は怯弱の士なり、今一度いへといひつゝ、立ちて、國光の一刀を拔き、その士の耳邊にあてたりしかど、士、皆はぢて、またいふ事なかりしといふ。されど、薩將、屢々その降を勸むるによりて、林氏は、いつはり降りて、城を出で城外に移り舍し、薩摩の三將をひきて城中に入れ、且つ、好意を表めして、屢々宴を設けてこれを招き、美人をいだして興をたすけしめしかど、薩將大によろこびて、少しも心をおく事なかりしが、その翌天正十五年三月、薩摩の兵は、一旦鶴崎城を引き拂ふこととなりし時、林氏、豫め、兵を乙津川に伏せたり。薩軍の、川を渡る時、川の兩岸より伏兵俄に起りて激戰して、終にこれを鏖にし、伊集院、白濱の二將を斬り、野村に重傷を負はしめたり。その後、野村は、逃げて、日向の高城にいたりて死きといふ。

彼の、細川忠興の妻の事は、世人皆傳へてこれを稱揚す。然かれども、かれは、二子及び身を殺して貞節を全くせしのみなり。林氏は、羸弱の兵をもて、目にあまる大敵を引受け、よく戰ひ、よく守り、遂に敵を鏖にせり。前者は、節を守りしといへども身を殺してその効なし。後者は、貞節を全くして、且つその効を納む、されど、林氏は、彼の、細川忠興の妻に越ゆる事一段なりといふも、決して過賞にはあらざるべし。林氏が、夫に後れて法門に入りしは、貞節を守れりといふべし。ろの子を完全に教育し、夫に代りて一城を守りしは、婦徳を全うせりといふべし。而して、かの大敵を鏖にす、古今有數の女丈夫といふべし。今の世の、束髪にして而も靴を穿てる、半洋人の自稱女丈夫、林氏に對して、果して何の面かある。

夫の忠孝を助くるは、女の忠孝にして、　（敬山公）
夫の忠孝を妨ぐるは、女の不忠不孝なり。
忠といひ、孝といひ、順といひ、貞といひて、
其の名は違へども、其の道の源は一つなり。



家政

折形

折形

有住齊

折形は、嘗て、女鑑第四十八號より、第五十七號まで掲載したりしかど、當時、多忙にして、暇を得ず、本意なくも中途に稿をとゞめて今日に至りぬ。今、總目錄を見るにつけ、あたらしきことゝ思はるれど、余りに時は隔てたれども、前のに續きて、此より誌さんとす。見ん人之れを諒してよ。

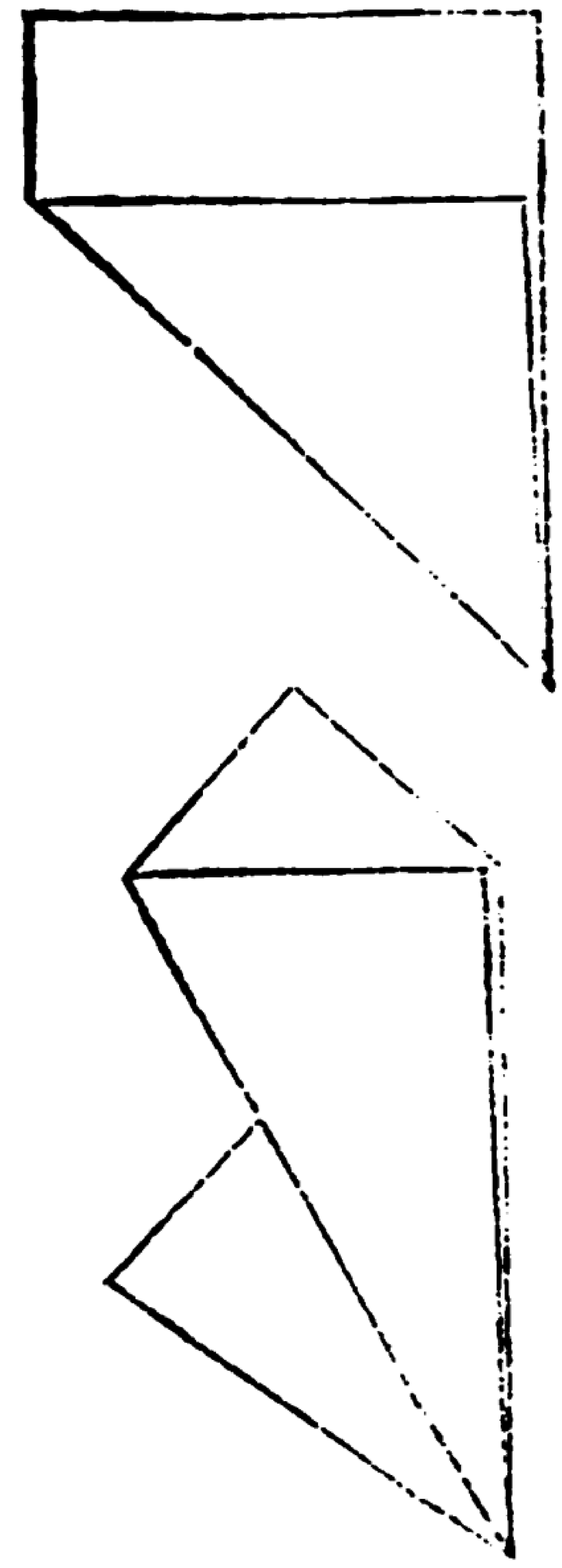
折形につけての概ねの心得は、第四十八號にもしのたることあれど、見ざる人の爲に、重ねてこゝにかゝぐ。

此の折形は、足利家禮節を定めたりし時に始まりて、德川家にも折衷し、諸禮式に用ゐられしものなり。

一、折形は、何によらず、紙二枚にて折るべし。一枚にて折る事なし。

一、紙裁樣、裏がねを用ゐる事。是を用ゐでは、恰好惡しゝ。

裏曲の圖



裏曲の法如レ此、竪紙を筋違に、二つに折り、又、大きなる方を、筋違に折るなり。是、折物の寸法なり。

一、折形に、眞、行、草の三種ありて、眞は上輩に用ゐ、行は同輩に用ゐ、草は下輩に用ゐるなり。至極の下輩、又家來などへは、襞なしにもするなり。

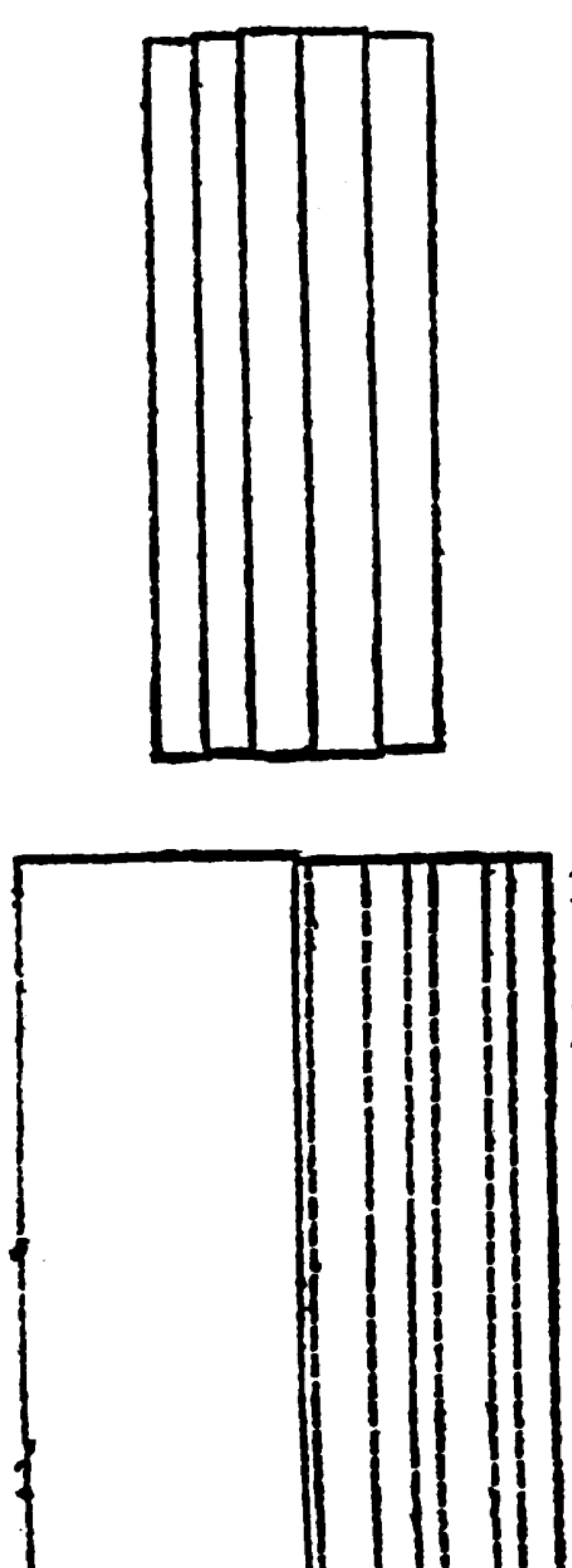
一、折形に水引を懸くる事、　折形の大小により、二把掛くる事もあるなり。婚禮の時は、花結、菊結、寶珠結の類、用ゐることあり。都て女房向へは、金銀水引を用ゐ。男子へは、白くれなゐを用ゐるなり。

一、紅白なれど、紅を我右に取り、白は左。金銀なれど、金を右にとり銀を左。青色なれど、青を右白は左なり。

挿畫は、折り上げたる處と、解きたる處とを合せかゞぐ。能く參照して稽古あるべし。

水引かけて、書付あるべし。
又水引なきものあり。

服紗、茶巾、煙草入包



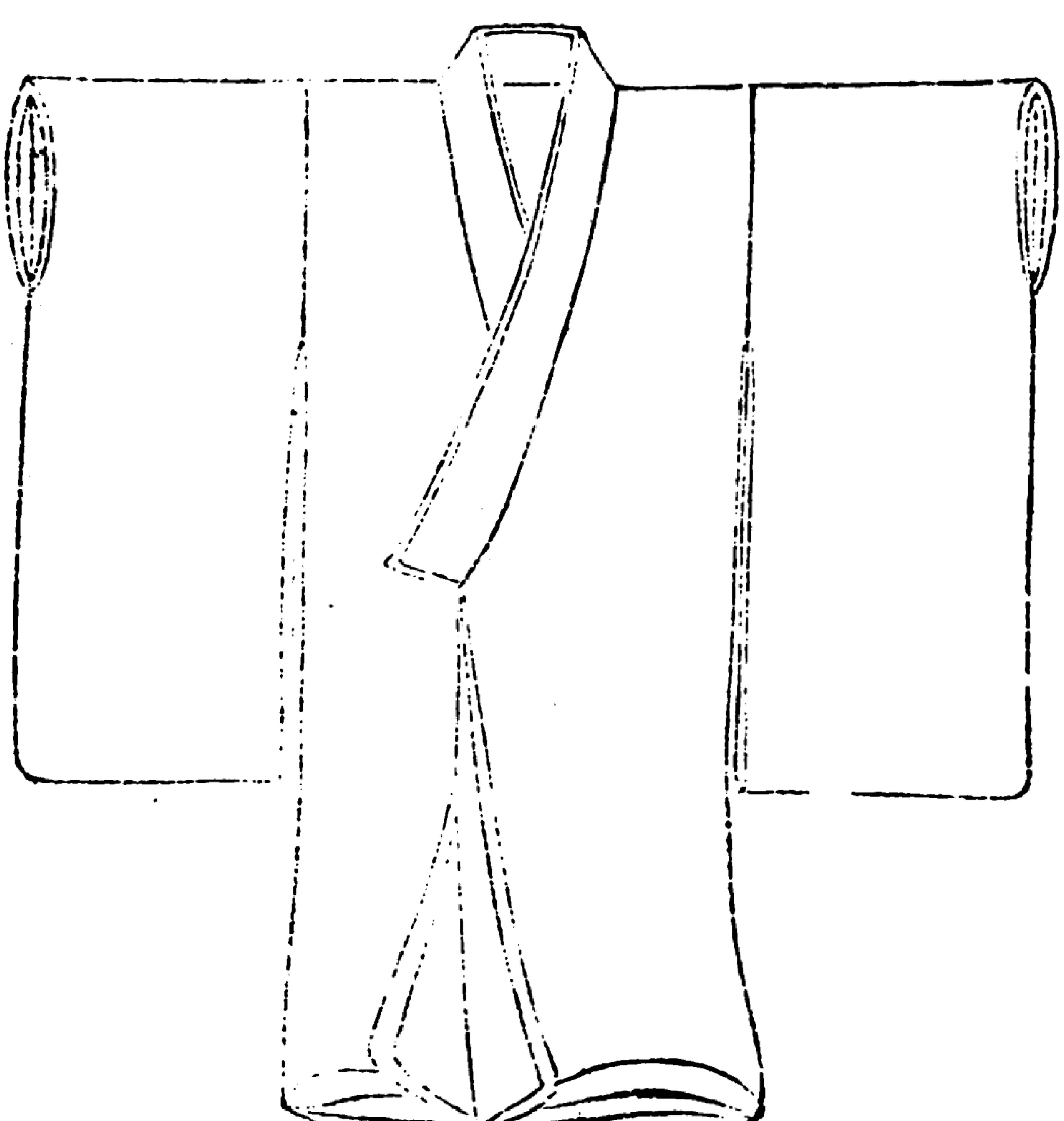
仝解

たちぬひ

西山たい子

（七十）白無垢比翼の縫ひ方

まづ並の小袖を縫ふ如にして表身衣をぬひ、それに裾に切りたるもの、背と脇と衽とをぬひ、褄をよき程に作りて裾合せをなし、襟をつけ、袖をつけ、綿を入れて、裾の方をよくつくりて、閉ぢおき、また裏身をも、表身にくらべてぬひ、その表裾に切りおきし切を同しくぬひつけ、裾まはりだけに綿を入れ、襟をつけ、袖をつけて、表身の綿を入れたるものに合せ閉ぢ、襟巾をも定め、表身の方なるを裏へかへし、裏身の方なるを表にかへし、裏の襟付のぬひめよりのとぢの如くにとぢつけるべし。其他袖口、ふり等は、前回の比翼ものと同じやうにすべし。さすれば胴のみ一重になりて、襟、裾、袖口 ふりばかり二重になるなり。



もと、仕事は流々と云ひて、縫ひ方もいろ〱なるが中にも、比翼ものなどは、もと都合によりて作りし

ものなれど、ぬひ方もまた定まらず。よく〳〵工風をこらすこそ要用なれ。

造花

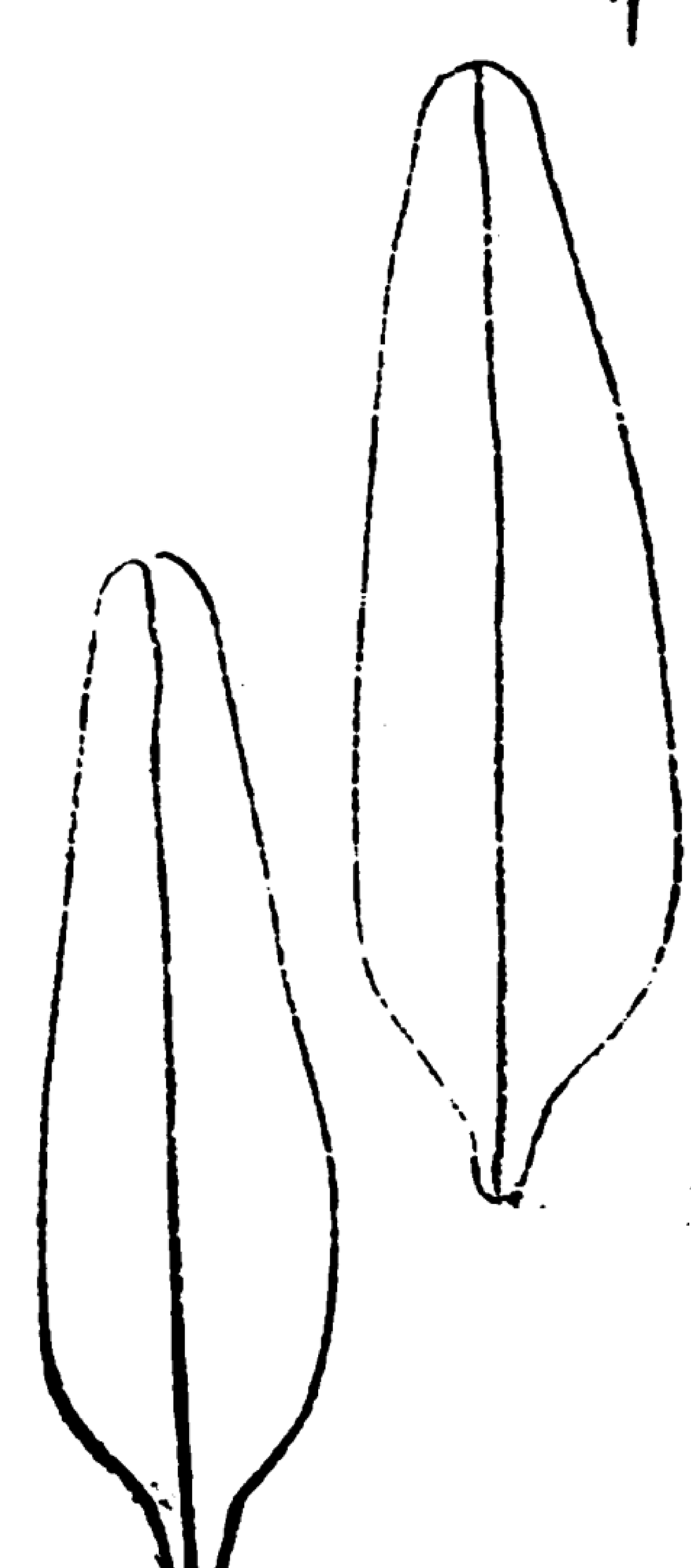
共立女子職業學校教授　伏見藤三郎

百合

滿開花の造り方　花瓣には、絖、又は寒冷紗を用ゐて、之を形に斷つには、始め、第七十九圖（甲、乙さく大小あるは只少しのみなり）の樣なる恰好に、造り上げんと思ふ大さよりも、少しく大きく斷ちて、さて絖なれど、裏より、縱に、細き針金に薄紙を卷きたるものを着け、後、寒冷紗にて裏打すべし。寒冷紗なれど、裏に、細き針金に薄青紙を卷きて着けたるまゝにてよろし。色

第七十九圖

甲



染方は、始め全体を「オウラミ」にて薄黄色くそめ、其上を「ヨオシン」にて又薄赤くそめ、後、中央を「ズカレット」にて少しく赤くぼかし、猶、其上を「コンゴレット」にて少しぼかしに染む（總て色染は、能く實物と見合して、濃きに過ぎ、薄きに渉らざる樣に注意すること肝要なり）。乾きたれど、之を、造らんと思ふ大さに、恰好よく斷ち直し、之に鏝をあつ。まづ、菊の一筋鏝にて、花瓣の中央の針金を夾みて

縦に引き、兩邊は、裏より、瓣鏝にて少しく窪ませ、先端は外部にそりかへらす樣にすべし。斯くして后、極く薄く溶きたる糊に「コンゴレット」を混じ、之を筆につけて花瓣に斑點を打つなり。蘂には、雄蘂、雌蘂の二種あり、雄蘂を造には、細き眞鍮の針金の先に、第八十圖に示す如く、上端三分ばかりを殘し

第八十圖



て、二所に、小く綿を卷きつけ、後、針金を曲げて、二所の綿を一つに折り重ね、針金の綿の着かざる所より、曲げたる端を一所に、厂皮紙にて固く卷き、元の方は、先よりも少しく太く造るべし。斯の如くして後、その綿のつきたる元の所より針金を折り曲げて、丁字の形となし、總躰に薄糊を引きて、乾かし、軸は、「グリン」にて薄く染め、頂には、糊をつけて、之に、米の粉を「コンゴレッ」にて染めて乾かしたるものを着け、花粉となす。雌蘂は、眞鍮の針金に、先太くなる樣に綿を卷きて、其の上より、雁皮紙にて卷き包み、元の處にいたりて又頓に太くなる樣にし、之に雄蘂と仝じく薄糊を引きて、乾かし、後、「スカレット」にてぼかすべし。さて、此の雌蘂一本を眞として、其の廻りに雄蘂六本をつけ、其の元に、甲の花瓣三枚を配りて、その間々に、又、乙の花瓣三枚を着け、その元より、直ちに、針金を眞として青紙を卷き、適宜に葉を配りて、莖を造るなり。葉は、寒冷紗を、「オウラミ」五分「グリン」一分五厘「マセンダ」五厘を混せ溶し、之に明礬を加へたるものにて染め、乾きたれば、花に應じて適宜の大さに、實物を見合して斷ち、裏より、針金に青紙を

巻きたるものをつけ、筋鏝にて筋を施し、莖に配るべし。

蕾の造り方　蕾は、鐵の針金の先に、蕾の形に綿を巻きつけ、其の上に薄糊を引きて之を固め、乾かして后、之に乙の花瓣三枚を着けて、各花瓣の椽に糊をつけ、綿の見ゑざる樣、三方より包むべし。猶、花瓣と花瓣の繼ぎ合せたる處は、高く筋を殘し、ろの間々は、筋鏝にて深く凹ますべし。總て百合は、その葉互生にして、花は、一年だちのものは一つ、夫より一年毎に一つ宛を增すものなれど、其の心得にて造るべし。

第八十一圖



だいどころ

火腿鷄卵燒方

先づ、火腿の上肉を、脂肪分のまゝ、凡そ二分位に薄く切り、之れを「フライ」鍋にて度々かへしながら煎燒になし、之れを、あたゝめたる皿に取り、其あとに、鷄卵を一つづゝ、割て入れ、蛋白の中央に蛋黃のあるやうになし、蛋白の固まるまで燒きて、之れ

をひらたき匙にて取り、皿に盛り、ある火腿のうへに載せ、少量の胡椒をふりかけて、成るべく熱き中に出すべし。但、鷄卵に食鹽をかけざるは、鍋の汁に、火腿の鹽氣の殘りあるゆゑなり。

青豌豆の煮方

青豌豆を煮る時は、先づ其莢を剝き、冷水の中に投じて、水の上に、浮きたるしひなをとり、能く洗ひて、上豆のみを「ソース」鍋に投れ、其隱るゝ程水を注ぎ、小匙一杯の食鹽と、砂糖を加へ、文火にて、煮ること凡そ十四五分間にて、煮熟したれば、水嚢にて其煮汁を漉し、豆を野菜皿に盛り、四匁の牛酪をれとして能くかきませ、冷ねざるうちに出すべし。

蠶豆の煮方

先づ、蠶豆の皮を剝き、能く洗ひ、煮鍋に投れ、十分に水を投じ、ゆでたるのち、笊の中にあげ、大匙一杯の牛酪、能程の胡椒、食鹽、とを加へて、能くかきませて、用ふべし。但、豆は、小粒のかたを佳しとす。

豚の山椒味噌煮

豚をこまかに刻み、筍、獨活、蒟蒻、など何れも煠で置、山椒芽を擂鉢にて擂り、能程の味噌を加へ、能く擂り交ぜ、前にゆでおきたる品を、鍋に投れ、牛酪を加へ、少しかきまはしたる後、味噌を投じ、尚四五分間にして用ふべし。

（豆腐製法）

豆腐は大豆の主成分たる植物乾酪素の凝固したる者なり。之を製するには大豆を水に浸したる後、石臼にて磨碎し、是に因て生ずる液を布にて粕さ漉し分け、其濾液に鹽膽汁(にがり)を加へて凝結するものを模型に入れ、水氣を去りて壓し固む



新古今和歌集講義（十）

鹽井ふく子

源重之

梅が枝に物うき程にちる雪を
　花ともいはじ春の名立に

○重之は侍從三河守兼信の子にて、兼忠の養子なり。天性和歌の達者にして三十六歌仙の中に撰まれしものなりとぞ○梅が枝「梅の枝」と云ひしなれど、梅の木と云ふも同じなり○物うき程に物うきはつねに云ふうきにはあらで、「物ぐさき」など云ふやうの意と云へど如何、やはりいたましきと云ふ意ならん。

○一首の意は梅が枝に物いたましきばかりふりかゝる雪は流石に花とも見えて面白けれど、人は花にまがふなど云へど、されど花のはうが、今少しのどかにて、しかもものいためなり、我は春の名を立てんために、人の如くに雪を花と見ゆるなどは云はないとの意なり。

此歌、花とは云はじ、是を花と云へど、春陽れこく至る怠りの名立てなれどなりと云ふ說多けれど、さる深き意にはあらで、たゞどうしても雪は雪なり、それを春の名をたてんと思ふために、

花と見ゆるなど、己れは云はないと云ひて一重に
花をまちし意なり。

山邊赤人

あづさ弓春山近く家居して
絶えずきゝつるうぐひすの聲

○あづさ弓は春にかけし枕詞なり。弓ははりてひくものなれどなり○春山は、春の山と云ふ事にて、何處にても春なれど云ふなり、山の名にはあらず○家居しては住みてと云ふ意なり。

○一首の意は春の山近くすまつて、常にたえず鶯の聲をきゝつるよと云ふ意にて、鶯は山里にして、始めて思ふまゝに聞くを得べく、山里のたのしきをよめるなり。

よみ人知らず

梅が枝に鳴てうつろふ鶯の
はね白妙にあは雪ぞふる

○此歌は万葉集にある歌なり○鳴てうつろふのうつろふは「うつる」ののびたるなり、たゞ「鳴きうつる」と云ふ意なり○白妙白くうつくしき事を云ふ○あは雪、春の雪は淡々と直ぐに消ゆるものなれどかく云ふ。

○一首の意は梅の木に鳴いて移る鶯の羽にしろく淡雪がふると云ふ意なり。

惟明親王

百首歌奉りし時

鶯の涙のつらゝうちとけて
ふるすながらや春を知るらん

○惟明親王は高倉天皇の第三の皇子、後鳥羽天皇の皇兄にて大炊御門宮と云ひし御方なり○つらゝは「つら〱」をつめて云ひしにて、氷ると一つらになれど、連々と云ひしなり。後の世には軒の下

に下がるもの丶みをつら丶と云へど、池一面には
りたるも矢張りつら丶なり。此處のつら丶は、や
はり軒に下るもの丶如きを云ふなり〇古巣は春過
ぎてより居る谷の事なり〇知るらんのらんは「だ
らう」などの想像の意なり。
〇一首の意は鶯はよくなくものなるが、定めし
その涙も今までは氷りてつら丶となつてゐたらん
が、今此の長閑なる春陽にうちとけしならん。そ
して、まだ古巣ながら春がきたと云ふ事を知るで
あらうとの意なり。
なくと云ふより涙を想像して、いと幼なく云ひな
して、あはれ深き歌なり。



漫録

雨月物語

蛇性の婬（續）

故人上田秋成

豐雄、刀自にむかひて、兄の見咎め給はずとも、術
に姉君をかたらひてんと思ひ設つるに、速く責なま
る丶事よ、かうかうの人の女のはかなくてあるが、
後身してよとて賜へるなり。己が世しらぬ身の、御
赦さへなき事は、重き勘當なるべけれど、今さら悔
るばかりなるを、姉君よく憐み玉へといふ。刀自打
笑て、男子のひとり寢し玉ふが、兼ていとをしかり

つるに、いとよき事ぞ、愚なりともよくいひとり侍らんとて、其夜、太郎に、かう〳〵の事なるは、幸にわばさずや、父君の前をもよきにいひなし玉へといふ、太郎眉を顰てあやし、此國の官の下司に、縣の何某と云ふ人を聞かず、我家保正なれど、さる人の亡なり玉ひしを聞ぬ事あらじを　まづ太刀こゝにとりて來よといふに、刀自やがて携へ來るを、よくよく見をはりて、長嘘をつきつゝものいふは、こゝに恐しき事あり、近來都の大臣殿の御願の事みたしめ玉ひて、權現にれはくの寶を奉り給ふ。さるに、此の神寶ども、御寶藏の中にて頓に失しとて、大宮司より國の守に訴出給ふ。守、此賊を探り捕ふために、助の君文室の廣之大宮司の館に來て今專に此事をはかり玉ふよしを聞ぬ。此太刀いかさまにも下司などの帯べき物にあらず。猶父に見せ奉らんとて、御前に持きて、かう〳〵の恐しき事のあるはいかゞ計らひ申さんといふ。父面を青くして、こは淺ましき事の出きつるかな、日來は一毛をもぬかざるが、何の報にて、かう良からぬ心や出きぬらん、他よりあらはれなば此家をも絶されん、祖の爲子孫の爲には、不孝之子一人惜からじ、明は訴へ出よといふ。太郎夜の明くるを待ちて、大宮司の館に來り、しかしかのよしを申出で、此太刀を見せ奉るに大宮司驚きて、是なん大臣殿の獻り物なりといふに助聞給ひて、猶失し物問あきらめん、召捕とて、武士ら十人ばかり、太郎を先にたてゝゆく、豐雄かゝる事をもしらで、書見ゐたるを、武士ら押かゝりて捕ふ、こは何の罪ぞといふを聞入ず、縛めぬ。父母太郎夫婦も今は淺ましと歎まどふばかりなり。公廳より召給ふ疾あゆめとて、中にとりこめて館に追

もてゆく、助、豊雄をにらまへて、汝神寶を盗み捕りしは、例なき國津罪なり、猶種々の財はいつ地にかくしたる、明らかに申せよといふ。豊雄漸此事を覺り、涙を流して、おのれ更に盗をなさず、かう〳〵の事ありて、縣の某の女が、前の夫の帶たるなりとて得させしなり、今にもかの女召して、おのれが罪なき事を覺らせ給へ。助いよ〳〵怒りて、我下司に縣の姓を名のる者ある事なし、かく僞るは刑ます〳〵大なり。豊雄、かく捕はれて、いつまで僞るべき、あはれかの女召て問せ給へ。助、武士らに向ひて、縣の眞女子が家はいづくなるぞ、渠を押て捕へ來れといふ、武士らかしこまりて、又豊雄を押たてゝ彼所に行て見るに、嚴めしく造りなせし門の柱も朽くさり、軒の瓦も大かたは、碎れちて、草しのぶ生さがり、人住とは見えず、豊雄是を見て只あきれにあきれゐたる。武士らかけ廻りて、ちかきとなりを召あつむ。木伐老米かつ男ら、恐れ惑ひて跪る、武士他らにむかひて、此家何者が住しぞ縣の何某が女のこゝにあるはまことかといふに。鍛冶の翁はひ出て、さる人の名はかけてもうけ給はらず、此家三とせむかり前までは、村主の何某と云人の、賑はしくて住侍るが、筑紫に商物積てくだりし其船行方なくなりて後は、家に殘る人も散々になりぬるより絶えて人の住ことなきを、此男のきのふこゝに入て、漸して歸りしを奇しとて、此漆師の老がまうされしといふに。さもあれ、よく見極て殿に申さんとて、門押ひらきて入る、家は外よりも荒まさりけり。なほ奥の方に進みゆく、前栽廣く造りなしたり、池は水あせて水草も皆枯、野ら藪生かたふきたる中に、大きなる松の吹倒れたるぞ物すさまじ、客

殿の格子戸をひらけぞ、腥き風のさと吹れくりきたるに、恐れまどひて、人々後にしりぞく。豊雄只聲を呑て歎きゐる。武士の中に、巨勢の熊檮なる者膽ふとき男にて、人々我後に從て來れとて板敷をあらゝかに踏みて進みゆく、塵は一寸ばかり積りたり、鼠の糞ひりちりしたる中に、古き帳を立て、花の如くなる女一人ぞ座る。熊檮、女にむかひて、國の守の召つるぞ、急ぎまゐれといへど。答へもせであるを、近く進みて捕ふとせしに、忽地も裂るばかりの霹靂鳴響くに、許多の人迯る間もなくてそこに倒る然見るに、女はいづち行けん見ゑずなりにけり。此床の上に輝々しき物あり、人々恐る恐るいきて見るに、狛錦、呉の綾、倭文繼、楯、槍、靭、鍪の類、此失つる神寶なりき。武士らこれをとりもたせて、怪しかりつる事どもを詳に訴ふ。助も、大宮司も、妖怪のなせる事をさとりて、豊雄を責む事をゆるくす、されど、當罪免れず、守の舘にわたされて、牢裏に繋がる、大宅の父子多くの物を賄して罪を贖によりて、百日が程に赦さるゝ事を得たり。かくて世にたち接らんも面俯なり、姉の大和にれはすを訪ちひて、しばし彼所に住んといふ。げにから憂め見つる後は、重き病をも得るものなり。ゆきて月ごろを過せとて、人を添へて出たゝす。二郎が姉の家は石榴市といふ所に、田邊の金忠といふ商人なりける。豊雄が訪らひ來るを喜び、かつ月ごろの事どもをいとほしがりて、いついつまでもこゝに住めとて、念頃に勞りけり、年かはりて二月になりぬ。此石榴市といふは、泊瀬の寺ちかき所なりき。佛の御中には泊瀬なんあらたなる事を唐土までも聞ゑたるとて、都より遠鄙より詣づる人の、春はことに多かりけり。

語つる人は必ずこゝに宿れど、軒を並べて旅人をとゞめける。田邊が家は御明燈心類を商ひぬれど、所せく人入たちける中に、都の人の忍びの詣と見ゆていとよろしき女一人、了髮一人薫物などもてこゝに立よる。此了髮豊雄を見て、吾君のこゝにいますはといふに、驚きて見れど、かの眞女子まろやなり。あな恐しとて内に隱るゝ、金忠夫婦こは何ぞといへど、かの鬼こゝに逐來る、あれに近寄給ふなと隱れ迷ふを人々そはいづくにぞと立騒ぐ。眞女子入來りて人々あやしみ給ひぞ、吾夫の君な恐れ給ひぞ、おのが心より罪に堕し奉る事の悲しさに、御有家求めて、事の由縁をもかたり、御心放せさせ奉らんとて、御住家尋まゐらせしに、かひありてあひ見奉る事の喜しさよ、あるじの君よく聞わけて給へ、我もし怪しき物ならば、此人繁きわたりさへあるに、かうのどかなる晝をいかにせん、衣に縫目あり日にむかへど影あり、此正しきことわりを思しわけて、御疑ひを解せ給へ。豊雄、人ごゝちして。僞正しく人ならぬは、我捕はれて、武士らと共にいて見れど、きのふにも似ず浅ましく荒果て、まことに鬼の住べき宿に一人居るを、人々ら捕へんとすれど、忽ち青天霹靂を震ふて、跡なくかき消ぬるをまのあたり見つるは又逐來て何をかなす、すみやかに去れといふ。眞女子涙を流して、まことにさこそおぼさんはことわりなれど、妾が言をもしばし聞せ給へ、君公廰に召れ給ふと聞しより、かねて憐をかけつる隣の翁をかたらひ、頓に野らなる宿のさまをこしらへし、我を捕んずときに鳴神響かせしは、まろやが計較つるなり其後船もとめて難波の方に遁れしかど、御消息しらまほしく、こゝの御佛にたのみを懸つるに、二本の

杉のしるしありて、嬉しき瀬にながれあふことは、ひとへに、大悲の御徳かふむりたてまつりしぞかし、種々の神寶は、何とて女の盗み出すべき、前の夫の良らぬ心にてこそあれ、よく／＼おぼしわけて思ふ心の露ばかりをもうけさせ給へとてさめ／＼となく。豐雄或は疑ひ、或は憐みて、かさねていふべき詞もなし。金忠夫婦、眞女子がことわりの明らかなるに此女しきふるまひを見て、努疑ふ心もなく、豐雄のもの語りにては、世に恐しき事よと思ひしに、さる例あるべき世にもあらずかし、はる／＼と尋まどひ給ふ御心ねのいとほしきに、豐雄肯ずとも、我々とゞめまゐらせんとて、一間なる所に迎へける、こゝに一日二日を過すまゝに、金忠夫婦が心をとりて、ひたすら歎きたのみける、其志の篤きに愛て、豐雄をすゝめてつひに婚儀をとりむすぶ。豐雄も日々に心とけて、もとより容姿のよろしきを愛よろこび千とせをかけて契るには葛城や高間の山に夜々ごとにたつ雲も、初瀬の寺の曉の鐘に雨收まりて、只あひあふ事の遅きをなん恨みける。三月にもなりぬ。金忠豐雄夫婦にむかひて、都わたりには似るべうもあらねど、さすがに紀路にはまさりなんかし、名細の吉野は春はいとよき所なり、三船の山、菜摘川常に見るとも飽ぬを、此頃はいかにおもしろからんいざ玉へ出立なんといふ。眞女兒うち笑て、よき人のよしと見玉ひし所は、都の人も見ぬを恨みに聞ゆ侍るを我身稚きより、人おほき所、或は道の長手をあゆみては、必氣のぼりてくるしき病あれど、從駕にえ出立侍らぬぞいと憂たけれ、山土産必待こひ奉るといふをそはあゆみなんこそ病も苦しからめ、車こそもたらね、いかにもいかにも、土は踏せまゐら

せじ、留り玉はんは、豊雄のいかばかり心もとなかりつらんとて、夫婦すゝめたつに、豊雄もかうたのもしくの給ふぞ、道に倒るゝともいかでかはと聞ゆるに、不意ながら出たちぬ。人々花やぎて出ぬれど眞女子が麗なるには似るべうもあらずぞ見えける。何某の院はかねて、心よく聞えかはしけれど、こゝに訪らふ。主の僧迎へて、此春は遲く詣給ふ事よ、花もなかばは散過て、鶯の聲もやゝ流るめれど、猶よき方にしるべし侍らんとて、夕食いと清くして食せける、明ゆく空いたう霞みたるも、晴ゆくまゝに見わたせば、此院は高き所にて、こゝかしこ僧坊どもあらはに見おろさるゝ、山の鳥どもゝそこはかとなく囀りあひて、木草の花色々に咲まじりたる、同じ山里ながら、目さむるこゝちせらる。初詣には瀧ある方こそ見所はおほかめれとて、彼方にしるべの人乞て出たつ、谷を繞りて下りゆく、いにしへ行幸の宮ありし所は、石ばしる瀧つせのむせび流るゝに、ちいさき鮎どもの水に逆ふなど、目もあやにおもしろし、檜破子打散して喰つゝあそぶ。岩がねづたひに來る人あり。髮は績麻をわがねたる如くなれど、手足いと健やかなる翁なり。此瀧の下にあゆみ來る人々を見てあやしげにまもりたるに、眞女子も、まろやも、此人を背に見ぬふりなるを、翁渠二人をよくまもりて。あやし、此邪神、など人をまどはす、翁がまのあたりをかくても有やとつぶやくを聞て、此二人忽躍りたちて、瀧に飛入と見えしが、水は大虚に湧あがりて見えずなるほどに、雲、摺墨をうちこぼしたる如く、雨篠を亂してふり來る。翁、人々の慌忙惑ふをまつろへて人里にくだる。　（未完）

浮世いかだ舟

作者不詳

傾城の事

今はむかし、けいせいといふは、天ぢくにも有けり。淫肆といふはけいせいの有所をいふ。淫女と、はすなはち、けいせいの事なり。かの一角仙人は、淫女にれとされ侍べるとかや、佛經にもとかれたり。唐にては、張重華が博物志といへる書に、百年の狐化して淫婦となると志るせり。よく人をまよはす事を云なり。はくらく天が古塚の狐詩にも、古塚の狐妖にして人をまよはすとかきたりけるも、みないんふの事なり。これをけいせいといふ事は、前漢の武帝に、李夫人を参らせし時に、その兄李延平が歌に、一たびかへりみれば人の城をかたむけ、二たびかへりみれば人の國をかたぶくとうたひける。みやこかたふくとかきたる字のこゑを傾城といふ也。日本には、鳥羽院の御時に、島の千歳和歌のまへといへるもの、白拍子のはじめ也。そのかみは、津々浦々のとまりとまりに是ありて、たび人をなぐさめけるゆゑに、ながれの女とはいふ也。いにしへ、江口の長は、ふげんぼさつのげ志んとて、ゆきゝの人にあひなれて、佛道の緣をむすばれしが、華嚴經には、五十五人のち志きのなかに、婆須蜜多女と申せしは、淫女にておはせしと說かれしを思ひ合せてきとく也。其後國々に遊君おほくいできたり。諸國の大名にちかづき志ゆゑんの興をもよほしける。大いそのとら御せん。手ごしの千手。いけ田のゆや。かやうのたぐひ、みな、いうくんなり。すゑになりては、諸國にけいせい町をたて、いんによおほくこめをきて、心だて二番なるきみゐてうめともがら、中頃は南花とかやな

づけし、いか成ゆゑなるらん。莊子は寓言とて、なき事をあるやうにかきたる。道人なりけるを南花の篇と云ふ。さだめてうそつきといふ心にや、たゃうつけたるものを、今もなんぐわとなづくるなり。●京のけいせいまちは、六條の三すぢ町、にしのとういんちうだうじとて有しを、さんぬる比よりひとつにあはせて、七條にし朱雀たんぼかいだうの北に、島原とて、ひせんの天草の一きのとりこもりし、しまばらの城のごとく、三方はふさがりて、一方に口有ゆゑに名づくと也。

次に、傾城ぐるひ異見の事。といふくだりあれど、女子には要なければ省きつ。

歩若黨になりし事

今はむかし、瓢太郎、しぶかたびら一重になりても、猶わかすしまばらに行て、わけ屋を頼み太夫さまをよべども、今は返事もせずあひもせず、かぶろやりても、そらしらぬふせなり。あげやもわすれたるていにて、ことのほかにぶあしらひなれど、はらをたつともかひなし。身すぎもなければ、家をもうり、せめて、武家かたの若黨にもなりて、奉公をつとめばやと思ひ、方々のお大名をかせぐ所に、ある大名、召しかゝへとて、其の身の藝能をたづねらるゝ。瓢太郎をねぢなほし、兵太郎とあらため、親の知行の勘状をさしいだせど、いや〳〵今の世は武勇も、くび勘定も、氏も、けいづもいらず。そろばんを得たるか、田畑のつもりをしりたるか、米のうりやう、金銀のまはしをだに心得たらば召しかゝへられんと仰せらるゝ所に、より親心得て、ずゐぶんのおくびやうものにて侍れども、算用かたはよくいたすと申されしかど、それこそ何よりちようはうなれ、いそ

き召しかゝへよとて、やがて、まづ、若黨になりて出たりけり。新參なれども、御はなしの共となされて、朝夕、大名の御まへにつめて、談合する事とては、家中へ出だす知行の米を、何とぞくわやくをかけて、せめて半分もとりかへすふんべつ。次には、領分の百姓共、たとひ妻子を沽却し、家をわけて、他國にはしるとも、年どとの年貢に未進なく、免をゆるさず、みなとりきる分別。次には、百姓の物てとをやくにかけてとりあげ、萬事の運上をとる分別。たゞよくしんをもとゝして、情も知らず、道をもわきまへず。家中をも、百姓をも、みなとりあぐる談合より外はなし。家中みな是にすりきり。借錢の淵に、くびたけつかりて、失食のゆく家れはし。兵太郎のしわざなりとて、憎みたつれども、やしろの鼠の、にくまれながらも、すべきやうなきか如く、れ大名をたてにつきて、さま〲申ふくむるほどに、にくけれども力れよぞず。千人のゆびさすものは、病なくして死すといふ事あり。待て見よ、はてらかしき事は有るまじと、かたづをのみて兵太郎をのろひ居る。

年中風雨考節錄

井上頼文

左にかゝぐる風雨考は、多年の經驗に據りて記せるれもむき、其序文に。醫學館に考定せる處の晴雨考は、黃帝素問の奧秘にして、醫門の樞要なり。こゝに五運六氣主客の進退司天在泉南北政の循環等其余の件々を詳にするに、内經素問を本據とし、難經甲乙傷寒金匱千金外臺運氣論奥等より、明清の諸家、及び本邦諸賢の著せる醫籍を採擇し、旁延壽院法印

貝原篤信岡本一抱子等其他の名家より、老農漁翁の卑賤に至るまで、ことごとく其説を輯錄し、累年親しく實測して効驗あるものを載せ。以て今年寒暑の遲速、風雨の多少、當時の晴曇、年穀の豊凶民病の徴甚を示し、刀圭の基本農家の用意、航海の標的たらしめんとす。然れども、陰陽は變化を常とすれど、寒極まりて熱となり。風却て雨となり。雷變じて地震となる事。これ亦乾坤の常道なり。去かのみならず分野の方位、各國の地勢によりて、變化多端にして、よく一小冊の盡すべきにあらざれど、只其常格を擧るのみ。四方の君子、これを天地の化合に照さば、必ず濟世の一助とならん。姦商これを以て利を得るの媒とする事を許さず。只これ一滴の不龜手藥。これを用ふるは其人にあらんと爾云。尾州醫學館門人等謹志。とあるをもて知られたり。

されど五行家の迂説も多かれど今其の要のみを節錄す。

子の日に東風有て卯の日雨あり●丑の日東風有て辰の日に雨あり●寅の日に東風ありて巳の日雨あり●卯の日東風有て午の日に雨あり●辰の日東風有て、未の日雨あり●巳の日東風有て申の日雨あり●午の日東風有て卯の日雨あり●未の日東風有て申の日雨あり●申の日東風有て子の日雨あり●酉の日東風有て丑の日雨あり●戌の日東風有て寅の日雨あり●亥の日東風有て辰の日雨あり

又曰●子の日の雨は立どころに止む、止ざれど寅の日に止む●丑の日の雨は寅の日に止む、止ざれど卯の日に止む●寅の日の雨は立どころに止む、止ざれど卯の日に止む●卯の日の雨は立どころに止む、止ざれど巳の日に止む●辰の日の雨は立どころに止

む、止ざれど戌の日に止む●巳の日の雨は未の日に止む、止ざれど申の日に止む●午の日の雨は立どころに止む、止ざれど十日に至りても陰なり●未の日の雨は申の日に止む、止ざれど戌の日に止む●申の日の雨は夕べに止む、止ざれど日を見はして久しく陰る●酉の日の雨は立どころに止む、止ざれは久しく陰る●戌の日の雨は立どころに止む、止ざれは久しく曇る●亥の日の雨は立どころに止む、止ざれは久しく陰る。

子の日風生して丑の日霖あり。然らずんは、卯の日の雨傾くが如し▲日出の時、霞紫色紅赤ならむ、七日に雨あり▲日の出入の時雲有て日を貫は、三朝の内雨あり▲六甲の日（甲子、甲戌、甲申、甲午、甲辰、甲寅也）雲東方に行けむ、甲乙の日に雨あり十干従て同し▲北斗の中雲氣ありて魁星を貫けは、四岸に雲れこり、夜雨傾が如し▲其日麗かにして風和すれど明日雨多し▲東風急なれど蓑笠を備べし▲雨五更に打て日中に必ず晴なり▲東風急なれど夜晴れ、冬日南風有て三日の霜を主る、秋西風有て必雨あり、夏の南風は晴を主る▲風單日に起は單日に止む。双日に起れど双日に止む。又風の方角は、其國其所にて違ふ。大坂に於て雲東北に行を入雲と名く、忽ち雨ふる、雲西南に行を出雲と名く雨遅し。伊勢にては西北に雲行を入れ雲と云雨急なり。張川の地も同し。

一年中風雨の考に、風の一條甚廣大にして、小冊に述がたし。東風の雨を以て一二をあぐ。東風は當日、又は翌日の雨にして述るに足らず。其例に非ずして雨と成占候を云。ちう東風と云へども東南風にして、正き東風にはあらず、又正東風も稀にあり。

一年中總考には、司天中運在泉の生剋にて、太過、不及、平氣と、年々變革す。年内を觀察して變化を知る大意なり。

一五運六氣にては、年内の正化變化を知る規矩あつて、氣候の循還を分別するに便なりと云へとも、神聖にあらざれど絶妙に至らす。爰には其繩墨を揚て、四季の移り変る運動氣化の大略を記す。

一毎月の下には、日月の宿度に離る平均の恒例を暦法に準す。

一毎日の條下には、晴雨の考を載て、宇宙變動は無窮なれとも、占候ある一二を述ふ。雨の日に雨なくして前後一兩日に有れは遲速するなり。候の過にあらす。年の大小、月の小大は、恒例に隨ひ、二十四氣は恒氣と定氣を分て記す。最卑最高を糺して運氣七曜の宿度を察て晴雨の便とす、又古の占候を摘て備ふ。試へし。六淫の邪有て運氣の正變にて民病と成徴甚を聞て忽治すへし。復清濛氣にて日月星度出没に變あり。七十二候は符合遠し。止ことを得さるはあぐ。先北極出地三十五度十分の考なり。

一八節風候も古格にして符合を不知わづかに萬分の一なり。

おきの玉藻（續）

永石德文

藤樹先生年譜（續）

十有八年辛巳、先生三十四歳。

夏二三子とともに、勢州太神宮に參詣す。此より前嘗て以爲らく、神明は無上の至尊なり。賤士にして貴人に近くすら、馴れて致レ瀆の恐あ

り、況や神明をや、是を以て終に神に詣拜せず。其后學日々に精微に入。故に以爲らく、士庶人も亦神を祭るの禮あり。然らば則神に詣する事もなくはあるべからず。且　太神宮は吾朝開闢の元祖なり。日本に生るゝもの一たび拜せずはあるべからずと、是に於て詣す。

秋孝經啓蒙を著んと欲す。疾に依て又成らず。明年終に啓蒙をなす。後其說經旨にかなはずとして改め正さんと欲す、然れども終に果さず。是年始て專格套を守るの非なる事を覺ふ。(ゆ)　是より前專朱註を尊信して日に講明之。小學の法を以て門人に示す。是故に門人格套に落在し、拘攣日に長して氣象漸く迫れり。或は圭角ありて同志の際も融通せず。一日門人に謂て曰、吾久しく格套を受用し來る。近來其非を覺ふ(ゆ)。格套を受用するの志は、名利を求むるの志と日を同して語るべからずといへども、眞性活潑の體を失ふ事は均し、只吾人拘攣の意を放去し、みづから本心を信じて其跡に泥む事なかれ。門人大に解發興起す。

一日門人に語て曰、昨夜夢に人ありて吾に光嘿軒といふ號を授く、光嘿の號吾に過ぎたり。只嘿軒可なりといひて、これより自ら嘿軒と稱す。今日にしてこれを思ふに、德光ありて下位に嘿し給へり。天何ぞ此を保佐し給はざるや。

冬、熊澤伯繼(德文いふ伯繼は蕃山なり)來て業を受く。去秋始て來て人をして謁を請ふ。先生其志の眞僞をしらず。故に固くこれを辭す(る)に、請てやまず。先生書を以てこれを辭す(る)に、尙請て曰、たとひ敎に與らずといふとも、如何そ一たび

拜謁することを許さゞると、其情甚愁て涙を滴に至る。先生其情状を聞知してこれを憐み、謁することを許す。尙業を受る事を許さず。強て歸しむ。冬又來て固く請て已ず。是に於て終に業を授く。

十有九年壬午。先生三十五歳。

春、中村叔貫來て始て業をうく、先生近時專孝經を講明して、常に愛敬の二字を揭げ出して、心体を体認せしむ、曰、心の本体原是愛敬的猶水の濕にしたがひ、火の燥につくが如し。只吾人種々の習心習氣に凝滯せられて心体の明蔽る。然れども親を愛し、兄を敬するの心、且赤子を見て慈愛するの心のごときはいまだ滅せず。時ありて發見す。此心を認て存養して失さるときは、則聖人の心なり。

冬十一月嗣子虎生る。此より前二男一女を生めり。皆月を踰ずして死す。

二十年癸未、先生三十六歳。

是年山田氏森村氏のために小學南針を撰ふ、秋中西常慶來て學を問ふ。此冬詩經を講ず。二南終て已む。中西氏も亦與聞。退て曰、嘗て予、洛に於て俗儒の講を聞こと久し。向に先生の學世儒に異ることを聞て、疑て以爲らく、何事をか說と、今講を聞て大に驚て感服すと、是に於て終に弟子となる。冬清水氏來て業を受く。

正保元年甲申、先生三十七歳。

春、森村氏山田氏のために神法奇術を撰ふ。夏四月加世來て業を受く。

是年始て陽明全書を求得たり。これを讀て甚觸發印証することの多き事を悦ぶ。其學彌進む。

先生門人に語て曰、予嘗て山田氏にれくるに三綱領の解を以す。其主善の解に曰、事善にして心善ならざるものは主善にあらず、心善にして事善ならざるものも亦至善にあらずと、此時予いまだ支離の病を免れず。故に誤て如此解す。門人問て曰、此解甚親切的當なる事を覺ふ(ゆ)。如何にして以て支離とす。先生曰、心事元是一也。故に事善にして心善ならざるものはいまだこれあらず。心善にして事善ならざる者も亦いまだこれあらず、門人曰、狂者の如きは心元無欲清淨高正大也、といへども、其事は破綻ある事を免れず、鄉愿のごときは、其事は中行の君子に似たりといへども、其心を則汚れたり、分明に是心と事と二つなるにあらず、先生曰、然らず、狂者の如きは心裏光明なる時は事爲も亦光明にして、些子の蓋藏なし。其世故を輕蔑し、且悉く人情に合はざるは、又其心いまだ精微中庸の道に入ざるが故也。其心精微にして事爲の破綻ある者はいまだこれあらず。鄉愿の孝悌忠信廉潔無欲の如きは悉く是世に媚び許容を求むるの穢腸よりあらはるゝ所の事なり。然らば則其事も亦善とすべからず。其の事の中行の跡に似たるを以て善とする者は、功利の意なり。然に或の曰く、此道大哉盜人も亦これを得ざるは巧をなす事あたはず。入る事先つは勇也。出るとき後るゝは義なり。分つとき均は仁也。此の三の者を得ざるは大盜を爲す事あたはず。是を以て道の離るべからざる事を見つべしと。此說笑ふべく悲むべき者なり。

一日門人に謂て曰、予嘗て持敬圖說原人を著す。當時工夫の要かくのごとくなるに過ずとす。工夫

寢饋に至て其說の塋ならざる事を知る。
二年乙酉、先生三十八歲。
今年の冬經書切要なる語をならび舉て解をなし、同志の益をとる便とせんと欲して、十一月より稿を始、纔に一葉計にして終に成らず。
三年丙戌、先生三十九歲。
春正月二十五日次男鎬生る。
是年郡主分部伊賀守を見る。先生の德ある事を聞、見ん事を乞ふ。邑宰先生に强。先生固辭す。后已むことを得ずして見ゆ。先生を待すること頗禮あり。然れども終に道を問ふことなし。
夏四月三十日夫人高橋氏死、年二十六。
四年丁亥。先生四十歲
秋鑑草刊行。先生嘗翁問答兩部を著す。然れども學日に進に至て、此問答愈其心に叶はず。改心の志ありけれど博く門人にだに授け給はず、然るに癸未の年梓人の手にもれて既に梓にちりばめしを幸に早く知て是を破る、板屋迷惑なるよしを再三歎くに依て損のつくのひにとて、女中方の勸戒の爲に嘗て著し置給ふ書を鑑草と題し彼に授く。
慶安元年戊子、先生四十一歲。
秋八月二十五日、先生卒す、葬㆓江西㆒。

（完）

春雨

井上頼文

臥龍雲を待ちて天に飛ばんとする新開の梅見んか、氷姿笑を含みて空に登らんとする小月瀨の梅めでんか、桃山の酒宴には、三千年の齡を延べ、林埼の淸遊には神代の春を偲ばんかなど思ふほどに、忽、世

界は闇がりぬ。天の安河の樋口うち放ちて、八十瀬の水をさか落しに落すが如く落ちかゝり來るは雨なりけり。さながら、磐屋戸の昔ればねて、心も胸もふたがりぬ。文机につら杖つくづくも思ふに、糸の如く絶えず、油の如くしめりてのどやかに萬物をうるほすこそ春雨のならひなれ。雲か雲にあらず、霞か霞かあらず、花の雫若草の露に依りて知らるゝぞ其のさがなる。さるを梅雨の如くかきくらし、夕立の如く降りかゝるは、花笑ひ鳥うたふのどけき春の心には違ひぬめり。人はよし春雨といふともわれは獨さは思はじと、晴れやらぬ空うちにらまへ、大なるなげき三つ四つす。かたへの友いぶかりていへらく。雲と風との有りてこそ月と花とはめでたけれ。況や此の雨は咲き匂ふべき花もよほしの便にあらずや。若草の萌え出んとするきざしにあらずや。また野山にわくがるゝ心を鎮めて書讀み歌詠むにふさはしき時ならずや。さるをなどうれたみ歎き給ふぞといふ。おのれ頭うち揮りつゝうめき出でたる

春に似ぬ空のけしきや九つの
　　わがはらわたをかきみだすなる

櫻花と大和心

小野水莖

雲か。霞か。はた雪か。千もとの梢今をさかりの山櫻。たゞ白雲の空をたはへらん心地ぞせらる。此の時を過さじとにや。都もひなもとも〳〵に袖をつらねて花より花にうかれゆくめり。

そも〳〵、これらの花觀るもの、果してまことに花をみるものなるか。まことに花をめづるものなるか彼の乙女らが、あてやかに眉をけづり、かしらいか

めしくかざり、うつくしききぬひきまとひて行くは眞ことに花をみるものにはあらじ。花よりもうるはしき姿をてらはんか爲、花をみる人にみられんが爲なるべし、八字鬚いかめしく金時計の紐胸にきらめかし、洋服のすがたきよげに行くはまことに花をめづるものにはあらじ。花よりもうるはしき姿をみんか爲、花をみる人をみんが爲なるべし。此の如きは、げに櫻の花にむかひてれもはづかしかしからずや。

さくらの花は大和心にかよへるなり。大和心はさくらの花にかよへるなり。まことに花をみるまなこを以ちて、さくらの花をみむ、いかにさくらの花が我が大和心にかよへるかを知らむ。「敷島の大和心」と詠みけんは、さくらの花のうるはしく、山に咲きみちて、朝日に匂ひたるが大和心にかよへるをいへるなり。「のこりなくちるぞめでたき」とうたひけんは、支那のひじりか志士身を殺して仁を爲すといひけんと同じ心ばへにて、我が國人が心のいさぎよきをよみ出でたりしものなり。ひかめるふるまひ、きたなき心一つもなく、たゞ我が國の爲、我が君の爲なりせば、かりそめにも此の世にあらんをねがはず、いさぎよく身をすてゝ、大君につくすこそ日本人の本心といふべけれ。さくらの花また此の如し。そもやさくらの花蕾を破りさきそめては、一夜の間にきら〱しく花やかに匂ひいづるも、盛り七日と世人のいふらむも、げにさる事にて、しだし經れどのこなりくちりはつるものなりけり。ましてあらしのさそふ事あらんには、三日をも出でずしてちりはてぬべし。其の花のちらん折には、花のしぼみを枝に殘さず。いといさぎよくちるこそめでたけれ。我が日本心をたもてるものは、常に櫻らの花のうるはしくさきには

ひたる如くにてこそあるべけれ。また、生をむさぼらず死ををしまず、一たびも我が國に事の起りたらん時はいさぎよく身をさゝげて、ちりぢかりもをしむ所なく、かくれたる名を後の世にのこす所なきこそめでたけれ。世にさくらの花ほどうるはしきものなく大和心ほどいさぎよきものはあらじ。あゝさくらの花は大和心に似たり。大和心は、さくらの花にかよへり。しかるに、彼の花を觀る人を見、また花をみる人にみられんが爲に、花を見るこそ、花のおもていとはづかしく、且口をしけれ。さくらの花を見ん人かへりみずてやは。思はでやは。

かくおもふ折しも、さとふき來たれるこち風、窓の外なる一本のさくらにおとづれて、吹きちらされたる花ひらの、二つ三つ文机の上にみだれちりきたる。あはれふかくぞ。

暴風の賜

三好越南

想ひ起せば、今を去ること七年以前、予が未だ北越にありしころ、同國岩船郡村上となんいへる所に至らんとて、新潟港を船出せしに、折りから暴風頓に吹きすさみ、汽船はさながら鞠の如く、高くあがり低くおちいりて、進行も自由ならざるものから、終に豫定の地に上陸すること能はず、辛くも粟生島に避難したり。今、當時の光景を筆錄し兼て粟生島を江湖に紹介するも亦面白からんと思ひたちて、左に其の顚末をものす。

時は恰も、四月二十四日のことなりき、予は新潟より村上に至らんとて、朝まだき食を終り、腕車を驅りて波止場に至りぬ。あまたの汽船のあるが中にも、

予か乗らんとする三號三吉丸は、早や既に黒烟はきたて、出帆の用意最と忙はしく、今にも錨をぬかんず有樣なりけれど、予はあはたゞしく瀬波上陸の切符を購ひ、投ぐるが如く船に入りしが、間もなく駸々と運轉を初めたり。此の時風軟こやかにて、浪最と平に、海面さながら熨の如く、折柄ふり出づる小雨は却て興をぞ添へたりける。さるほどに、船ははや五里餘も過ぎしと覺ぼしく藤塚濱といふ所にてしばし運轉を止め、此こにて二人の乗客を上陸せしめ、再び運轉を始めしは、恰も六時を過ぎし頃なりき。予はさきのほどよりそゞろに睡眠を催せし折なりけれど、雨のやみしを幸ひ、二三の人々と共に甲板に上りしが、只見れど、新潟は僅に髣髴の間に認め得たり。左なきだに數椽の茅屋は、藤塚、村松の沿岸に隱見し、波光帆影の眉睫にれつるさま、宛ながら畫きたる如く、終に予をして、覺えず數刻の時人とならしめたり。既に鹽屋も過ぎて、岩船に近づかんとせしころほひ、西北の風頓みに起り、雨さへ打ちまじりければ、予は直ちに甲板を下りしに、早や四五人の醉ひ臥したるをも見たり。予は、是にては、瀬波上陸は覺束なしと思ひ、船員に問ひしに、安全なりと答へしかど、さらばとて此處に上陸することを思ひ止まり、心ならずも乗り行きし程に、こゝより瀬波までは、僅か二十分を經ざるうちに着するものから、左までの事もあるまじと思ひきや、今しも西北の風は眞西と變り、大雨盆を覆すが如くふりそゝぎければ、船の窓々は、みなたて込しをもて、船内は一圓炭酸氣の爲めに蒸さるゝが如く、温度は殆んど八十度以上にも達せしなるべく、乗客の苦悶いはん方なかりしがやがて瀬波へ着しければ、

頻りに滊笛を鳴らして艀舟を呼べとも、いかでか艀舟の出し得べきや、濱邊には人影だにも見へざれど、船長も今は詮方なく、此の上は粟生島に寄船するより外なしとて、其旨を乘客に通じ、船は一層の速力を加へ驀地に粟生島に向ひて馳せたりける。去程に、船長、機關師等の盡力大方ならざるも、船最と小なるが上にも、波亦高けれど、流石に度を失ひて、進行も自由ならず、雨は漸く小止みとなりしも、風は益々烈しくして、濤のたける音すざまじく、船はさながら木の葉の如く、高く揚るよとみれど、たちまち波の底に陷り、狂瀾怒濤は幾度ともなく逆捲き來りて甲板を洗ひ、或は横さまに船に嚙みつく勢ひ、今にも覆沒せんず有樣なりけれど、乘客は皆安き思ひもなく、今は五十余人の乘客も醉はざるものとては僅にに四五人に過ぎず。起たんとすれど眼眩てゐたヽず、皆々嘔吐を催せしが、中にも痛く醉ふたる餘り、血を吐きたるものさへありて、苦悶のさま最も憐れに見受けられぬ、予は幸にして醉はずありしが、さりとてまた膽を冷さゞるにもあらず。斯かりし程に、船も次第に進み行きしが、何時しか風波も、やゝ穩かになりゆけど、頓がては醉ひ臥し居たるものも、稍巳に復りたり。此時汽船は既に粟生島に近つきしとればしく、汽笛を鳴らして着船を報ぜしかど、一同は我を忘れて起き上り、窓よりさしのぞけど、島は既に目さきにありて、山々は屛風の如く船を掩ふへり。しばらくして、船は運轉を止め、乘客一同上陸せしは、恰も午後二時五十五分なりし。此時、同じく風を避けんとて打ち集ひ居たる、汽船一艘と、和船十余艘とを見受けたりしが、此の汽船は、即ち新潟酒田間定期航海の一號三吉丸にして、今日しも新

潟に至らんとて、早朝酒田を出帆せしも、加茂を過ぐる頃、同じく暴風に逢ひ、さては此處に寄船したるものなりとぞ。左れど、是等の船は、如何にして此の暴風を豫知せざりしかと、予は私かに不審を抱き居りしが、上陸の後、新聞に就て檢するに果して、此日既に暴風の警戒ありしなり。

（未完）

東京廿四景（二十三）

銀座

蓬舍女史

雲にそびゆる煉瓦づくりの層棟の七八町たちつゞきたる街の、中通りの馬車の路と、兩側の人ゆく路とを界するに、二列の柳の並木ありて、黄塵十丈の中にも、流石に春は青々とめざして、なよやかに吹く風になびくは、目もあやなり。中央の鐵路を奔る鐵道馬車、ゆくもあり、かへるもありて、ひきもきらず、煉化石たきつめたる兩側の道に往來する人は、旁午して織るが如しと云はんもおろかなり。夕暮になれど、人は鳥と共にいそがしく、夜に入りて、往



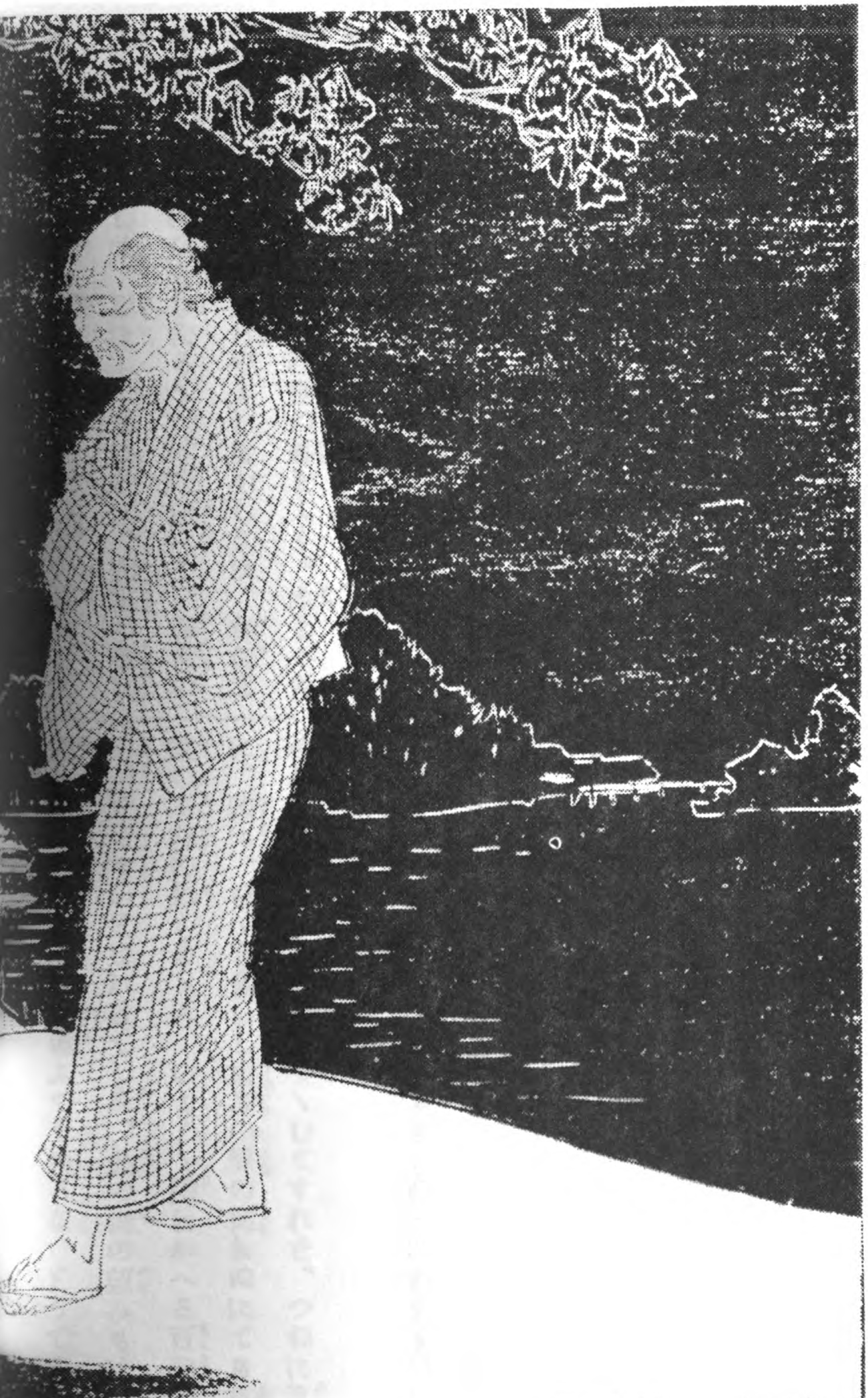
來いよ／＼繁し、瓦斯燈二列にたちつゞきて、不夜城の心地するに、電氣燈さへ加はりて、戸々の店前晝よりも明かに、げに闇の夜も、銀坐ばかりは月夜の心地すべし。やう／＼ふけらくまゝに、鐵道馬車の往來は全く絶え、兩側の行人も、今は數ふるばかりになれど、乾聲高くひゞきて、足音はじめてめづらしくなりぬ。夜色蒼茫の間に、厦屋縹緲として、晝間熱閙の俗地も、さすがに天上の瑤臺かと疑はる青柳の糸のなびくは、今更に人を招くかとなづかし、地にれつる人影のあきらかなるに、顧れど、月は楊柳の枝にあり。天風たゞ浮世の外をふく。水をへだつる樓臺よりひゞく糸竹のふしをかしきは、如何なるあてへ人が月にひらきたるうたげの筵にや。石橋の上にたちつくして、思にふくるほどに、短笛の聲高く歩み來るは、目の見えぬ人の、たつきの爲めとて深更までさまひてありくかとあはれなり。

朴平（廿一）

白魚女史

如何に一旦は氣強う仰せられて、出で行かせ給ふとも、もと情深き主君の御心人のいたつきときゝては、よもや遠くへは足もむき給ふまじ、やがては思ひもかへし給ふらんと、朴平なほ心にたのみたれど、情なや、文雄は遂に其日歸り來らぬとはあまりのつれなさ。

朴平は、なほ、百代にはつゝむとすれど、つねに耳に、頭に、ひゞき覺えし溜息の聲の聞えぬにても文雄の不在の知らるゝに、いよ／＼消えかへる百代の心。とてもいとはれはてし身、此の世の望みも早や絶えぬ。朴平、もう氣遣ふてくれるな、とうても給





はるな。妾は、此まゝ此處に、よしや死しても、人はあはれとも、妻とも見給はずとも、かくていつまでいとはれんよりは、亡き伯母様の御側に早う行きて、後の世をたのみ参らさんが妾の願ひ。文雄様、もはや、はしたなくも、せきも、いそぎも致し侍らじ。百歳を過ぐし給はゞ必ずもとの若草のつまとればしかへし給ひてよ。伯母様必ずお傍へおきて、とのやう御心かけて給はれとむせび入りしが、また、流石に、母のなげき、朴平のかなしみなど、思ひやられて、後髪ひかゝる心地に、それも忍ばれず、うきにも堪ゑず、彼方此方思ひまはせど、おのづから氣も遠くなりて、力なげに、そのまゝ伏し沈みたるさまのあはれさは、雨を帶びたる梨花一枝の春といはむもおろかなり。朴平も彼方を思ひ、此方を氣遣ひ、力つき、こんつきしを、われとはげまし、つと庭に下りて、櫻の枝の小さきを一枝折りとり、ちよんまげにかざしながら、「としふれど齢は老いぬしかはあれど花をかざせど物思ひもなし」と聞き覺えたる古歌をもじくりて、聲はりあげ、やよ孃様、朴平、ふとよき歌を詠み候ひぬ。ちと御門人に入れさせ給へなど云ひて、わざとをかしげにうちたはぶれつゝ、かう、こもり居られてはいよ／＼おつむりにさはり給はんとて、さつと百代が部屋ひきあくれど、百代はおどろき、起き上る顔の色、目の色、朱を注ぎて、見るからもゆるばかりなるに、朴平もつくりじ勢もとみにくだけて、はら／＼と涙になるもいぢらし。百代もせきかぬる涙ほろ／＼とこぼしながら、朴平に向ひ、あるにても、うき身世にあるからに、いたう老いの心をいたまするよ。朴平、妾は、まだ、ともかくもなる身ならねど、老少不定の世の

たとへ、もしも汝に先きだつ事あらは、必ずなげきて玉はるな。母様にも當分は秘めておきてよ。また、たとへ、文雄様は何とてばみ玉ふとも、屍ばかりは伯母様のれ墓に埋めて玉はれとて、あとは涙にむせびかへるを、朴平もしばらくは泣くのみなりしが、あな、何と云ふ心よわき事をば仰せらるゝぞ。朴平、朴平、朴平は君を殺ろして、何で此世にながらへ申さるべき。さばかり心弱くならせ玉ひしも、此頃のれやつれも、皆朴平が罪、如何にしてつぐなひまゐらさんと歯がみなしてのくやみなきに、百代はやゝ涙をぬぐひ、あな心なかりしよ。朴平なきてなくれそ、如何にもならんと思ひて云ひしにはあらず、たゞ春毎に起る頭のわづらひ、もしひきつくるやうの事あらむと思ひて、かりそめに云ひしのみ、深く思ひぐるゝな。ほんに愚痴なる自よとて、くるしき笑みをよそほへは、いな〳〵、さる御病氣ありしとも兼ねては聞きまゐらせず、まして醫師の診斷にも、御心配よりの事なれは、もる藥もなしときゝ申す朴平のむねのくるしさ、もしれわづらひのあまり、如何にもならせ玉はゞ、朴平も此世にまち奉る事も、つかへ奉る事も候はず、もとより老の皺腹、かききさき御先へ御暇を頂きまつらんのみと、きつさうかへての朴平の言葉に、あな、朴平、さるいまはしき事かりにもきかせて玉はるな。妾のはかなき事云ひしは、わしかりし。もはや必ず愚痴は云はず、思はじとて、袖をもしぼるに、朴平から〳〵とうち笑ひ、君たにまさむ、朴平は死ねと仰せらるゝとも死にはつかまつらず、目出度御祝言すませぬまでは、朴平必ず死にませぬ。何はとも命こそ物の種子なれ。死ぬるはいつにても出來ること、いざ孃様、物思ひ忘れ給は

んため、しむし庭に下りたち給へ、伯母御前のめでられし櫻、かざしともし給へとて、百代が手をとり强ひて下りたゝせ、その枝、びんにさし給へ、此枝を靈前に手向けまつらん。御靈前といへど、今年は彼岸にお墓參ゐり仕らざりき。此枝を以て一寸參ゐりてん。櫻は佛に供ふるをいむと云へど、奥樣の好まれ給ひしものはまた格別、何も〳〵、好ませ給ひしものを供ふるが追善。それに今日は大學のボートレースのよし、若殿も昨日より春野樣の御宅なれば、今日は必ず御見物に入らせられしならむ。それにも、これにも參ゐりたさ、一日おん暇給はれとは、文雄を尋ねて、引きも來ず、百代が心をも安めんとの誠より出し僞り。いたづきの身一人おきて、もしもの事ありてはとて、折り〳〵たのみし近所の嫗に家をたくしおくなど、萬づに心をくだく忠僕のいとほしさよ。

文林



夕蛙　徳大寺實則

さくらちるしつくの田ゐの夕ま暮
　聲をつくしてかはづなくなり

花宴　東久世通禧

菅の根のながき春日も暮にけり
　さけくみかはす花がげにして

春朝　佐々木高行

朝づく日のどかにさして春がすみ
うすくれなゐに匂ふそらかな

春路　鍋島直大

春の日は花のいろ香にあくがれて
とほき道さへいとはざりけり

瓢に花の枝をへたる　津輕承昭

たづさへし瓢かたぶけくみかはす
花のむしろのおもしろきかな

蝶　長谷信成

菜の花も見ゑぬあたりに飛てふは
なにゝこゝろのとまるなる覽

首夏月　宮地嚴夫

若葉さす木の間にみゆる夕づく夜
かげなつかしき夏はきにけり

雨後花　小出粲

春雨はやみてもはれぬくもり日に
つゆもさやけき花のいろかな

瓶に椿させり　阪正臣

玉だれの小瓶にさせるひとえだの
はなにこのめの香さへ添つゝ

水上落花　植松有經

みなかみはいかにちるらん大井川
絶ゑずながるゝやまざくら哉

迷子　遠山英一

まよひつゝなくなるよりも中々に
たづぬるおやゝ悲しかるらん

杜若　師岡正胤

かり衣ひとしく染めてかきつばた
花はひとをもへだてざりけり

郭公をたづねてきかすといふ題を　仝

卯の花は折りて歸れどほとゝぎす
きゝつとけふもいはれざり鳬

夕霞　井上頼文

夕つく日かげろふ岡のこまつむら
かすみに消えて暮れそめに鳬

飛鳥山にて　大畑弘國

あすか山あすとすきなどさくら花
雪とみだれて散らんとすらむ

あすかやまあすも來て見ん櫻どな
こゝろの駒に手ずなまかせて

暮春　三浦千春

花もちりとりもかへりてあすか山
あすか春さへくれむとすらむ

撫子露　仝

はなのうへのつゆはなみだか撫子ど
かなしと思はぬ人しなけれど

夏鳥　仝

わかかへて枝さす方にあさりして
とりやすゝしき陰もとめけり

首夏雨　三輪義方

にはたづみ繁る若葉のかげみえて
夏めきにけるけさのあめかな

君恩如海　安齋篤敬

青海原なみしづかなる大み代の
ふかきめぐみをかづきける哉

三傑のかた　仝

みだれゆく世をはかなみて桃園に
ゆくすゑちぎるますらをの友

老見花　黒澤仙太郎

春の日は花のさかりのうれしさに
わが身の老をわすれてぞ見る

古寺花　仝

山寺のはなはのこれど鐘のねとの
風にひゞきて人ぞちりゆく

行路花　龜谷行

こゝろあての家をもとはで路の邊の
花の木かげにけふもくらしつ

ふたすぢにわかるゝ山のろそ道は
花さくかたに行くべかりけり

筆寫人心　宇井正夫

みづくきのあとしなければ大方の
人のこゝろもしられやはする

老女對鏡　仝

れいにけるかゞみの影に手弱女の
うちむかひてはかこちぬる哉

花下言志　木庭芳香

契りおきし春をわすれぬさくら花
あだなる名をも人なれはせぞ

落花入簾　仝

たれこめしをすのひまもる夕風に
春のなごりと散るさくらかな

故郷山吹　鍋島榮子

一ゑだは折てかへらんふるさとの
かきねにさける山ぶきのはな

庭卯花　前田朗子

卯花のさきみだれたるわが庭は
ひのくれ行もおそくぞ有ける

落花　柳原愛子

玉ぼこの道ゆくそでにちりくるは
　たかすむやどのさくらなる蘭

山家落花　松平健子

のどかなるのきばの山のさくら花
　風なきけふもちりみだれつゝ

侍郭公　日野西廣子

大そらは雨ぐもながらくれにけり
　こよひすぐさじ山ほとゝぎす

海邊郭公　北島以登子

もしはやくけぶりの上を横ぎりて
　浦なみとほくゆくほとゝぎす

のどかなる日護へにいつ　三島竹子

うつせ貝うつゝともなく拾ふまに
　日はいりにけり春のなみまに

水邊山吹　三宅龍子

れりたちていざたをりてん山川の
　汀にさけるやまぶきのはな

花のちれる　鶴久子

たがやどの梢にかぜのふれつらん
　庭のしばふにはなのちりくる

蛙　服部磯子

櫻はなちりてながるゝやまかはの
　さゝれの上にかはづなくなり

旅泊眺望　小池道子

わがふねを迎ふる人もましるらん
　はとばにみゆる燈火のかげ

野春月　諏訪晴子

あづさ弓はるのかすみも引馬野の
　あたりればろに見ゆる月かげ

山家花　仝

つねうとき人さへとひて山ざとも
花ににきはふころとなりぬる

名所落花　内田遊歌子

いまさらに何をしをりそ花ふゞき
雪とちりかふみよし野の山

新竹　仝

春過ぎてぬるまみしかき此ころを
よ長く見するにはのわかたけ

待花　柴田靜榮子

あさ霞へだてぬさきにれきてみん
そのへのさくら咲しつると

惜花　師岡須賀子

たくひなきにほひならすは櫻ばな
なか〳〵風もさそはざらまし

暮春　仝

春もはや殘りすくなくなりにけり
のどけきほどは夢の間にして

鳩　安東菊子

いへはどの音信つたふ世にしあれど
今はなにせんかりのたまづさ

行路花　仝

はるの日のそゞろあるきの面白さ
はなより花のかげをたどりて

閑居水　海上壽子

よのなかをうしとのがれし山住の
こゝろにかなふ水のおとかな

箱根山にてよめる中に　清水靜子

うき玉のやみにもそれとみゆる哉
はこねのやまの杣のかゞりび

苗代　　仝

しめはへて祝ふ門田のなはしろに
　水をまかせてゆたねまくなり

正誤

前號、諏訪忠元の花の歌のうち、月前花の下句、及び海邊春月といへる歌を削り、月前花の下句には、海邊春月といへる歌の下句入る

又、柳原愛子の歌（海邊春月）の上句を削りて、そこに、小池道子の歌（花宴）の上句を入れ、さて、小池道子の歌の上句は「さむしろの打しめるまで思ふとち」といへるなり。

以上は、活字の植ゑ誤りに付、こゝに正してその粗漏を謝す。

水邊卯花　　三浦千春

夏のけはひのたつまゝに、前栽の木草も、やう〳〵しげくあをみわたりて、時鳥のはつ音またるゝころ、夜一夜ふり明したる雨の、今朝はやみて、朝日花やかにさしたるに、やり水の、あふるゝ斗りなかれめぐりて、たゞ〳〵に、石間にむせぶおとなどの聞ゆるもいとすゞしけなり。すこし日たけぬれど、其水のほとり近う咲きなひたる卯花の、末いとおもけなりつるが、露のおつれど、枝うちうごきて、人も手ふれぬに、ふとかみざまへあがりたるは、雪のふりかゝれる竹の、日影まちて起かへりたらむやうにて、いみしうをかしと見ゆるに、ねぶたかりつる目もいつしかさめはてゝ、

手すさびに淸水むすべは卯花の

波は袖にもかゝりける哉

卯花の雪のかけみるやり水は
　むすぶも寒きこゝちこそすれ

など、うちうめきて、何心もなうながめ出せるしりへに、身しろきしてはした女の、はしたなく、朝けにて侍りとおどろかしつれど、こたびは興ざめてこそいりにしか。

梅を見ることは

三好越南

はるの日影うらゝかにてりて、空も心ものどかになりまさるに、谷の鶯もふる巣をいでゝ、眞がきに來なくはつ音を、心しりげに南の梢は、ひとつふたつひもときそめつ。やがて、ゆきかふ袖も、いつしかえならぬ香をとめて、軒をせきまでこちたく咲きいでたる。世にもめでたくぞながめられける。されど、幼なきわらべどもの、園生にれりたらて、しづえを手折りて、かざしとするを、たしなむる人の心も、げにと覺ゆ。さてあしたには、のどかなる日影に、花の色もまさりて清らに見え、吹くとしもなき夕風には、いとしめやかに香りわたる。わけて、おぼつかなき夕月夜に、處もしれて、えならぬ匂ひのかをりくるもゆかし、さはれ、朝な夕なに獨りのみながむるは、あたらしけれど、同志の友垣つどへて、むかしのみやびをのあとを尋て、おのがしゝ思ふことをかいつけむやと思ふ折しも、日頃同志學びの窓にすむ人々の、三人ばかり、袖かいつらねて、けふはしものどかなれど、そゞろありきせんとていでつるに、名も高き君が宿の梅が香にさそはれて、かくこそ來つれといふ。よき折なれとて、引き入れてあるじ

す。やがて、かはらけとりて、花見かてら、をかしきことをもいひつ。唐やまとの歌とも、折につかはしきをうたふ。さて、あるじのいひけらく、おほよそ百八十の花はあれど、世に梅の花ばかりめでたきはあらし。そは、木のふり梢のさまは、いとかたくなにむつかしけれど、其の花のみやびやかなる、其の香りのたぐひなきに、まして霜雪をしのぎて、たゆみたるけはひも見えず。八千種の花に先だちて、春のあしたに匂ふさまは、げにますらをの心に似たり。かれ、いそのかみ、古きむかしは、人の心あつくすなほにして、人々皆此の花をめでにける。されど、呉竹の世うつりて、近き頃は、人毎にうきたはれたる心もちて、櫻ばうたんのあでやかなるをのみめでぬ。花見るにつけても、古へ今のけぢめかくのごとし　ますらをのあとたえなんとするも理りならずや。と、言へど、皆しか〳〵とてうなづきぬ。

さて料紙とうでゝ、おのも〳〵思ほしきことをつゞるに、あるじのよみていだせる歌

冬こもり、春さりくれど、八千くさの、草木もゝ、ねぬ、花はしも、さはにさけれど、久方の、天ぎらひふる、雪の中に、かをれる梅は、山風の、あらびし夜半も、れくしもゝ、しぬび盡して、こち吹けど、まさる香りに、うぐひすも、とふらひきなき、うつせみの、人もうたひぬ、其の香り、其のふりはしも、大丈夫の、心なるらむ、此の花の、さきのさかりは、見れどあかぬかも。

藤嶋神社に詣づ

師岡須賀子

越前國、吉田郡、牧の島なる藤島神社は、元弘建

武、延元の忠臣、左近衛中將贈正一位新田義貞公をはじめ、義宗、義興の二朝臣、脇屋義助、義治の朝臣たちを、合祀れる御社なりけり。おのれ、去頃、この地に來りてより、いつしかと心に掛けつれど、冬のほどは雪多く、はた障ることありて、得詣でられざりしを、ゆくりもなく、此度信州より來たれる此の校の教諭小穴いち子、全じく橋本やす子と、己と、三人して詣でんとて出で立ちつ。四月二十日ばかりのことなれど、遠近の霞はふかうたなびき、道すがらの桃櫻は、いと艶に、色さへ香さへ、なつかしきに、そゞろ心もうきたちぬ。行くこと半里ばかり、呉服町の北手の極まる處に至れど、別格官幣社藤島神社道といふ標いと大きくてあり。其處よりは、福井市外なりとぞ。四五町にしていと廣き田面にいでぬるほど、漸々空うちくもりて、雨さへ降り出でぬ。年頃心にかけつる事なり、斯ばかりの雨なにかはいとはんと、一人が言へど、濡れぬともいかで參でざるべき、騒がしからで、この雨こそ中々に心ある業なれなど語らひつゝ行くに、彼方に華表見えたり、嬉しきものから、あはれかゝる處にど、すゞろに悲し、左右の畠には、菜の花眞盛にて、黃金色の莚しきつめたらんが如くなるに、あはれ／＼この田面、五百年あまり昔はいかにかありけん、君の爲、國のため、いかに御心をつくしましけん處ぞと、偲びまつれば、胸のみつとふさがりぬ。やう／＼くもりて見えずなり行く遠山のまゆ、はた心有りげなりや。或先生の、此處に詣でられし折の歌なりとて、やす子の

たつね來て昔をとへど夏ながら
吹く風さむし藤島の里

また、鷹巣山をたづねて

鷹巣山おろす嵐に一度は
越のくさ木も靡きしものを

など、云はるゝに、いづれも〳〵打しめりて、誰も物云ふ事もなし。華表の内は寛かにして、樹木もいと多く、八重櫻は此處かしこに匂ひて、咲きの盛りなるが、そほふる雨に、いよゝ色香のまされる。即て、この御神たちの御心ならんかし。各額き拜みまつりても、猶只無言なるは、神等の、當時の誠忠を偲びまつりて、限りなきおもひにしづむなるべし。とばかりは立もとほりつゝ、罷りなん心地もせず。小松宮殿下の物し給へる御額、拜殿のさま、本殿のさまなど拜しまつる。御社は檜葺ふきにて、檜もて築かれ、いと神々し。金銀の飾こそなけれ。都の芝の東照宮の宮居にいとよく似たまへり。かくて、やう〳〵時過ぐるに、徒に立歸らん心地もせざるに、やす子は、此の福井の人にて、土地にも知人も多く、事の樣もよく知りたれど、寶物拜觀の事、社務所に行きて尋ねらるに、神官快く諾はれたり。いち子も、おのれも、うれしとて手あらひ、口漱ぎて、先御兜より見まつる。こは、新田義貞公御兜とありて、この神の御最期の折までも冠りたまひしものなりとぞ。形は、後勝山といひ、四十二間張八幡座にして、一間毎に三十番神の御名を彫み、前に如來秘密、神通之力。の二語あり、象眼もて之をかざりたり。元應二年、相摸國人明珍作とか承る。これ、かの燈明寺畷なる御舊蹟の土中より出でたる物なりとぞ。あはれ〳〵、こを冠りましけん折の神の御心、御いさを、其が万一も如何でおしはかりまつり得られん。かしこしともおろかなりや。其後福井藩主之を藏めたま

へるを、春嶽公是を修理して用ゐさせられしを、後宮内省にたてまつられ、又之をこの御社に下し賜へるなりとぞ。なほよく承りつれど、我にもあらず、胸ふさがりてなん。

其他、後拾遺集の歌か丶れたる詠二首和歌義貞とて、

行路萩を

ゆきやらでやすらふ袖の見ゆるかな
　こ萩花さく野への通路

鹽屋烟を

もしほやく烟と見ゑて海士の家の
　ひら〳〵つきじ夕ぎりの空

などの、御筆の跡たゞならぬに、御遺狀と申すものなん、堪へがたきまでにて、得拜し終へざりける。楠公、結城公、其他の御親筆など、いづれも〳〵當時の事思ひまつりて、いはん方なしや。宮内省御下賜の御大刀御像など、いつれもかしこきものいと多かりき。實に〳〵かなしとも口をしとも、言はん方なきは、當時の有樣なりけり。我等かく數ならぬ女にしもあれ、もしその折に生れあひたらましかば、御楯ともならましものをなど、甲斐なき齒かみせらるも、また止めがたき心なりかし。かくて、いよ〳〵去りがたけれど、掲げらる丶諸大家の歌どもいさゝか寫しつるも、この神の御功しのはる丶心のあまりなりけり。なほふり止まぬ雨に、いと丶涙もそぼちがちにて、まかり出しが、今日の事、いち子も、やす子も、別に書けるものあるべし。おのれはた言出でんことの葉もとみに浮ばねど、寫しつる歌の內、いみじきをしるして、後の思出とし、將未だ參で給はぬ人々に見せ參らせんとす。其次第のごときも、筆のまに〳〵なるを、いたくなとがめぞや。

動きなき國の爲とや末とほく　九條　道孝
　直なるみちを神守るらむ

世をひさにかけてそ守る藤島の　壬生　基修
　神心こそたふとかりけれ

新田山一木の松の末葉まで　毛利　元徳
　繁り榮行く世となりにけり

君か代のなかき守とたのむかな　松平　慶永
　ゆるしの色のふち島の神

國の爲なげうちし身を藤島に　中根　雪江
　神とまつらすけふそ尊き

かきりある命はすてゝ限なき　籠手田安定
　名を世にのこす藤しまの神

動きなき國の柱とまもりませ　林　信立
　共に功をたてしこの神

藤島の藤のかつらの打たへ　猿渡　容盛
　みてくら使絶ゆる世あらめや

みや柱動かぬ御代を藤しまの　間宮八十子
　神も心にかけてまもりけれ

色かへぬ松にゆかりの藤しまの　堀　秀成
　神の宮居や千代に榮えむ

あはれ〳〵、かく詠みたまへる君達も、まう大方はこの世にはしまさぬを、あなあはれ〳〵。書き終へて見出せば、雨なほやまず。軒端の花の雫いとゞそほちぬるに、御社の花の本、いよゝ偲はれなむ。



雜報

●天皇陛下御駐輦の御摸様　畏こくも洩れ承る處に據れば、天皇陛下には、行幸以來、彌御壯健にましくて、御体重も、目下二十四貫目餘に達し給ひ、侍醫等も、行幸の御健康に適はせらるよしを奏上奉りしやにうけたまはる。日毎に朝は御庭にをりたゝせ給ひて、そこはかと御覽せられ、時にはかしこくも御手づから花など折らせて、花瓶に挿し給ふこともあり、朝の御食きこしめさせてよりは、大御政の奏聞を聞きゝて、親ら御裁斷あらせられ御暇には、御殿の御裝飾をもみそなはして、さて夜に入りては、御書見、又は、侍從を御前近く召されて、今昔の御物語などあらせらるゝと承る。

●皇后陛下にも　行啓以來、常に御機嫌麗はしくれはしまして、折々舊女官、一條家舊臣などの御伺ひ申上ぐる中には親しく拜顔を賜はりて、御昔語などあらせ給ひ、何かしは健かやりやなど畏こき御詞を下さるゝ事もありときく、御心添への厚き申すも恐れ多き事なりかし。

●大御食　御駐輦中の大御食は、東京より到り居る奥三郎兵衛、及京都の堀五郎兵衛、西村市兵衛に命せられ、日々、御所に料理人を出し、錦小路

及び上の店、其他より鮮魚を取寄せ、調進し居れるが、右は野菜物及魚類を調進する迄にて、陛下に奉るものは、大膳職、皇后宮へは皇后職にて、夫々煮焚しまゐらす例なり。恐れ多けれども、その御摸様を記し奉らんに、大膳職、及皇后職にては、何れも白服洋を着し、清浄を専らにし、何品へも手を觸れず、すべて其器々にて之を扱ひ、煮焚の御什具は、兩陛下別々に爲し奉り、何れも西洋竈を用ひ居らるゝ由、御食膳は白木造りにて、御飯器は陶器、其他御皿鉢の類は何れも銀製のを用ひさせられ、煮焚たるものは直ちに蚊帳地を覆ふことゝし、御酒の器も、銀製の大神酒徳利形なるよしにて、御朝は、午前七時、御晝は正午、御夕は午後五時と承る、右大膳職及皇后職には雜仕とて十二三名の婦人、何れも小紋の衣服を着し、赤き前掛樣のものを纏ひ、青帶を施しぬ。雜仕の手にて奥向へ持運びを爲せた、奥には給仕とて、何れも一定の束髮にて、黒地洋服を着けたる婦人同じく十二三名ありて、其手を經て之を女官に渡すなりと承はる。尤も御洋食の御料理調進方は別に東京より大膳職に隨伴し來り居りぬと申す。

●英照皇太后御遺物下賜　英照皇太后御遺物は御先例に則とらせられ九條、二條、鷹司の三公爵家を始め御緣續きの皇族方、御近親の華族、及び宮内大臣、國務大臣等に御下賜あらせられたるがその數は、千に近くにものぼれりときく。又高野山金剛峯寺へは、御遺髮を納められたるにより、同寺へ金百圓を賜はり、尙御遺物を左の通り下賜せられたり。

一御　鏡　　二面
一緞子幔幕　紫下り藤御紋付　一張

一御旗　紫綸綾御儀式御用　二枚
一御旗竿　紫螺色塗下り藤御紋付　一組

●山陵の靈岩　孝明天皇後月輪陵には、上層に三個の靈岩を安置し、其の形狀は、立花の天地人の位置を具備せるものゝ由なるが、今度後月輪東北陵にも同樣靈岩を据ゑらるゝことゝなり、成るべく先帝陵の靈岩と同所のものを用ひんとて、三十年前御陵工事の際、其靈岩を探求せしものどもを召して之を問はれしに、其靈岩は、泉山東南の谷と、稻荷山三ッ峯奥谷の間より出でしものなりとの事にて、此程より人夫を其山中に派して岩を探さしめ居らるゝといふ。

●向陽會の和歌獻詠　在京都の華族が畏き邊の御思召により、歌道研究のため組織したる向陽會は、會費として毎月御手許金を下賜せられ、會場にとて桂離宮の使用をさへ許させ給ふ程なるが、創立以來最早十餘年に及び、山階宮殿下は、始終會長として、各華族を勸誘し、會員を奬勵し居給へるが、今回御駐紮中御徒然を慰め奉らんとて、此程會長の宮より「春述懷」といへる題を各會員に頒ち、詠歌を鈍色雲形の短冊に認めしめ、去卅日天覽に供したりといふ。

●嵐山燒　京都の嵐山燒は、優美高尚を以て好事者の愛する所となり居りしが、今回同地の野々宮土器にちなみて、一種の菓子器杯を製し始めたれど、四方より詩歌を送り來るもの頗る多く、冷泉爲紀伯の如きも、左の歌を送られたりと云ふ。

　　ふりむかしにならひてそする
みかひらか造る手ふりも野々宮の

●春季音樂大演奏會　春期音樂大演奏會は去る八日午後一時より、上野公園音樂學校内の奏樂堂に

於て開けり。參會者は朝野の貴紳、貴夫人、令孃、外國婦人、及び内外斯道の名家等千餘人なり。さて何れも其作噺高尚にして、其演者も亦名家なれど、優美を極めたれども、中に山室保嘉、萩岡松柯、山室千代子三師の胡弓、箏、三絃三曲の「鶴の巣籠」の曲及び幸田延子女史等の奏したる「ヴァイオリン」は最も精妙を極めたりといふ。當日中村秋香氏の作りたる「佐保姫」の歌は左の如し。

「佐保姫の、惠こそ、嬉しくも、惶けれ、春立つと、云ふ即て、雪も氷も、忽ちに、解ゆきて、大空は、いつしかと、麗かに、打霞み、野に山に押並べて、うら若草、萌渡り、百千鳥、聲面白く、遠近にぞ、囀る、」

梅もや、ほゝゑみ初めぬ、青柳も、亦萌ねいでぬ、吹く風は、日に添ひて、暖かになり增り、鶯歌ひ、小蝶は踊り、見る物も、聞くものも、おやしく、心を、惱ましぬるよ」

待たれ〳〵し、山櫻、綻ひぬれど、世の人の、心を先づは、散りぬるや、海棠に、山吹に、咲きちりて、春もや、暮れぬめり、」

いかにして、留めん、立歸る、佐保姫の、おはれ、其の歸る、袂を」

●賢士烈女肖像の彫刻　東京美術學校にては、目下西鄕南洲翁の像型製作中なるが、今度岩村男爵の主唱に係る本邦古今の名將賢士烈女節婦、大凡百七十餘人の肖像彫刻を擔當し、先づ其原型として楠公父子櫻井訣別の圖を彫刻したるが、右彫刻は高さ凡一尺二寸別に彩色を施さゞるも余程閑雅のものにて、出來上りたる後、岩村男爵は一々之が傳評を加へ、尚其事蹟を永遠に傳へんため一堂を建立すべし

といふ。

●華族女學校の二令孃　（桐之舍投す）

華族女學校は、我が國女學校中の最も高位なるものにて、さきの校長西村氏大に力を盡して改良を計られたる以來大に面目をほどこし、現校長細川氏にいたりて一層の光彩をそへ、あはれ皇室の藩屛たる華族の女子を敎育するにはぢざる所となれり。さて、余は、今、此の華族女學校中にて、文章に秀でられたりといふ二令孃を江湖に紹介せんとす。二孃とは、やがて、西村澄子、伊東初子の二人の君なり。澄子は宮中顧問官西村茂樹翁の令孃にして、初子は、海軍中將伊東祐亨氏の令兄祐麿子の令孃なり。二人は同級にありて、友垣のかたらひむつまじく、共にはげみて、成績も人に優れたれど、敎授のかたく、も、甲斐あるものにおぼして、よろこびたならるゝどさく、二孃共に國文に秀でて、和歌散文等もめでたき作すくなからず。そは追々に諸孃に紹介すべし。澄子孃は、習字、漢學の道にもたけ。初子孃は習字、英語に愛で、共に糸竹の道にも達し、且謠曲をも學ぶるゝよし。殊に澄子孃は、梅若實氏の門下にて名高きよし聞き及べり。なべて貴顯の令孃には、令名を聞くこと尠く、常にくちをしく思ひつるに、今兩君の事をきゝて、いと喜ばし。二孃益々勉勵して、あはれ日本女子の模範ともなり給はんことをいのる。

寄贈のまゝ

貞婦とみち

一家窮困に陷りて、不幸に沈淪するもの、かへりて、孝子貞婦を出すこと多きは、蓋、同情相憐むの人情に依りてなり。身貧にして、足

らざるなく、好む處たゞ意のまゝなるものは、反りて、孝貞の名も顯しがたきものなるに、身は富有の家に育ちながら、家に在りては能く父母に事へ、嫁しては、能く舅姑夫に從へ、變に會ふも撓むなく、自ら艱苦に甘んじも、終始一貫その節をまけざるもの、とみち、やがて、その人なり。とみちは陸前國志田郡伊場野村士族佐藤善也の妻にして亡松前主水の四女なり。萬延元年生る。天性柔順にして慈愛深く、家にゐて父母に事ふることとまめやかなりしが、年十五にして夫善也に嫁き、年尚幼なるに心をつくして姑夫の心を慰め、僕婢をあはれみ、舊臣を懷け、能く一家の和睦を保ちたり。然るに后七年、不幸にして善也顚狂病に罹りてその本心を失ひ、或は家具を擲ち、或は戸障子を破るなど荒々しき擧動をなすことあれども、狂人の常とて亦如何ともする能はざりしが、年をふれども治すべきけしきなければ、親族舊臣等相謀りて人家しげき所にたくは、病の爲にもよくあらじ、且四隣にも迷惑を感ずるなるべしとて、仙台の地をはらひて今の處に移せしが、その后も病狀さらに怠らず、或は山野を狂奔し、或は家中に蟄居するも、とみちは常にその傍をはなれず、看護奉養に心をくだきし爲、幸に外に害を及ぼす事もなかりき。斯くして、十六年の久しき、猶、一日の如く、常に夫の心を慰むるを以て無上の樂しみとなし、且、平常夫を待遇すること尊客の如くす、或人、とみちに謂て曰く、狂人は禮を辨へず、何ぞかくのごとく禮を厚うするに及ばんやと。とみち泣て曰く、人の父となり、主となり、長となるもの、常にあらねど、誰か之を尊敬せざるものあらん、さるを、今、夫病に罹りしため人その禮を失ふもの多し、我はたとへ

その夫の病に罹りて禮を辨へずといへども、いかでか婦たるもの丶道をつくさでやはと、その慇懃鄭重なること人の怪むほどなりしと、とみちが心のそこ思ひやられていとあはれなりや。とみちの里方は、元數千石を領せし家にして、兄弟姉妹多くは舊門閥家なるを以て、今にても、とみちを訪ふときは舊臣を伴ふを以て、とみち他人に夫の病狀を見らる丶を耻ぢて、訪ふものを少くせんとし、故らに、その親籍にも音信を踈遠にせしかば、親戚等もその故をあやしみしが後にはその心情を悟り、心中を憫察して、切なる用向あるにあらざれば訪はずなりにたりといふ。子は女一人男二人をもてるが、家事の故にて、はやく長女に聟をむかへ、今は、その地の村長をつとめ居れりといふ。

●自轉車にて結婚　世には、好奇心なるものもある習ひとて、殊更に異樣のいでたちにて、人の目を驚し、以て自ら喜ぶ輩も尠からず。こ丶に世界最大の都會と稱せらる丶倫敦府の伊太利街にて、男は名をアヒルレ、カスピーといひ、女は、エミル、ババンシアといふ、共に流行社會に名高か丶りしが、頃日此の男女は結婚の約を結びて、目出度其の式を擧げたるに、新夫、新婦は、各五千フラン(我九百九十圓)をなげうちて合乘自轉車を新調して之に打乘り、其の式に參するもの數百人みな何れも自轉車にて定めの寺院に馳け集れり。さすがに倫敦にてもか丶る例は未だこれなかりし處にして、その當日は觀るもの寺院の近傍に雲集して非常の賑ひなりしといふ。

●全國私生兒の統計　女子に最も尙ぶものは、淑德節操に在り、既に悖德、破操の行あらば、數百の美も、亦、何ぞ稱するに足らんとは、古賢の誡め

なり。洵に此の言葉の如し。女子は、常に此の言葉を服膺して、敢て忘れざるこそ本意なるに、廣き國内には、往々心得違ひしたるもあり。今、最近の統計に依りて、全國生兒の、公、私比較を見るに

府縣名	公生兒	私生兒
東京	三八、六八一	三、七二八
神奈川	二二、四七七	一、二一六
埼玉	三四、〇〇三	一、一〇三
千葉	三一、三九八	一、四六七
茨城	二九、七四四	一、二三五
栃木	二三、八四七	九二〇
群馬	二二、八八七	一、二三三
長野	三二、五四四	九九三
山梨	一二、二七六	二二九
静岡	三五、七五三	一、〇六〇
愛知	四四、五三四	三、六五一
三重	二五、九一六	一、四〇二
岐阜	二七、四九三	一、八〇八
滋賀	一九、三四七	一、四四六
福井	一八、〇二二	一、一七六
石川	二一、三八四	一、七三一
富山	二四、三八〇	七六四
新潟	四八、六二七	二、四三六
福島	三〇、二一五	一、三七九
宮城	二五、四三三	一、四三〇
山形	二三、六七三	二九〇
秋田	二三、三〇七	一、〇七九
岩手	一九、七六六	六七三
青森	二〇、三〇四	八〇四
京都	二二、七五六	二、二八九
大坂	三〇、八〇三	七、二五〇
奈良	一四、〇四五	一、九二〇
和歌山	一六、三一七	九一〇
兵庫	四一、九四四	四、二二一
岡山	二四、一三六	二、一三六
廣島	三五、八四〇	二、一六八
山口	二二、二八三	一、二一六
島根	一五、二五九	一、四五四
鳥取	八、八〇八	一、〇一二

徳島	一六、四〇九	一、二八五
香川	一七、三七三	一、九六七
愛媛	二三、五六八	一、四六五
高知	一四、三六三	一、〇一三
長崎	一八、三六五	一、四四二
佐賀	一四、七七九	五六五
福岡	三七、〇九五	一、六七四
熊本	二七、〇七九	一、〇二六
大分	二〇、四四四	一、二五〇
宮崎	九、八九二	七八二
鹿兒島	二五、四六四	一、四四四
沖繩	一一、七一五	六五一
北海道	一〇、九二三	三、一七六
總計	一一三、二九九	七六、〇九二

（以上明治廿八年）

斯の如く、その私生兒の多きは、そも如何なる故にや、猶國々につきていはんに、私生兒の最も多きは北海道にして、公生百人に付私生二十九人余に當れど、北海道は尚未開に屬し、戸籍法も不完全なれど、暫く之を論外とし、全國中私生兒の最も多きを大坂とし、奈良之れに次ぎ、鳥取、香川、京都、兵庫、東京、愛知之れに次ぐ、大坂は公生兒百人に付私生兒二十三人余に當り、奈良は公生百人に付私生十三人餘を出し、鳥取は公生百に對する私生十二強の割合となり、香川は百に對する十一強となり、京都兵庫は十人強となり、東京は十人強に、愛知は八人強に當れり、以て各國風俗の一端をもうかゞひしられて、淺まし、いかでつゝしまでやは女子たち。（大谷生投）

●殺氣滔々　此の日頃は何故にて、かく殺害さたの多きや、春は、誰しも心浮び氣たちて、兎角隠かならぬものから、自然に殺氣を帶びて、かくはわら〳〵しき所業にも及ぶものか、誠に憂たきかぎりなり、各新聞紙にても日々傳ふる處のもの常に三四件

をくだらさるべし、就中殊に殘酷なる府下御茶の水橋の謀殺といふは、現在己の妻をころしてその衣をはぎその髮を斷ち胸面部其他に刀痕を加へて之を川に投てたり。又府下小岩村にては、母子共謀して、その夫たり父たるものゝ、しかも病蓐に在るを絞め殺し、あつかましくも、之を强盗の所爲としてその筋にとゞけいでたる、その惡逆無道實に記すに忍びざるなり。又三重縣にては、人を殺してその面をはぎ、胸、裸体となして山中に投じたるあり。深き恨みはあるにもあれ、かゝる殘忍を極るは、そも如何なる意にか、元より何れも一時のでき心、忿憤に心くらみたるには相違なからんも、その父母、妻子の間に起るに至りては、自ら覺えず慄慄すべし。あな、此の世には、胸、鬼もありけるよ、恐るべきかな。

●食物眞味考(全一冊)　こは故大川梅翁がものしれかれしを、男通久といへるが刊行せしなり。梅翁みつから序にしるしていへらく。

(上略)さても魚の眞なるは味すぐれてうまく野菜とても季候にむかへむ味よし云々(中略)さすがくの樂あるも宇治より送れる茶を壺にひめれき茶壷の口をきりひらき人々に進らするをむねとすべきやあるじのあつかひふかき心を汲み去る客あれどともにあひ逢ふ折ふしはこよなうあはれにうれし殊更料理のとりあはせ心くだりても季節たかへるものはせんなしたとひいける魚しても眞たがへるは味なし野菜も季候はやきをめつれどあまりにたがへるはあじきなしすべてそのこゝろを得て時のたがひなく味よきを進らするたよりともなさんためこのふみをしるして食物眞味考となづけぬ。

これにて意は見ゑつらん。部を春夏秋冬に分ちてあらゆる魚介禽鳥野菜等をとりあつめてその季節をしめし、終に陰陽両暦一覽表及食物分析表をもそへたり。石版すり美本にして女子の見るべきには恰好のものなるべし（寶捌丸善書店中央堂等代金三十錢）



明治三十年自六月至十二月女鑑歌文兼題

月	歌	題	文
六月	五日歌	曉郭公	雨中待友
	廿日歌	夏懐舊	朝顔
七月	五日歌	山内一豐妻	作文の添削を乞ふ
	廿日歌	遠村白雨	池蓮
八月	五日歌	緑蔭散歩	海邊に遊ぶ
	廿日歌	電信	團扇
九月	五日歌	野逕秋	瓶の菊を見て
	廿日歌	松間月	辭書の撰擇を乞ふ
十月	五日歌	籬菊	祖先の祭日に友を招く
	廿日歌	海邊紅葉	茸狩の記
十一月	五日歌	深夜時雨	長〳〵病み臥せる人に寄す
	廿日歌	落葉滿庭	新嘗祭
十二月	五日歌	遠山雪	友人の非行を誡むる
	廿日歌	田家歳暮	爐邊閑話

教の庭



五月廿日兼題　夕水鷄

天　三河國幡豆郡平坂町　石川樂子

友もなき淋しきやとはゆふくれに
たゝく水鷄もうれしかりけり

地　熊本市白川新敷町堀染一　木川里子

夕月のさすにまかせししはの戸を
何にあけよとたたくくひなぞ

人　三重縣伊賀國府中村　服部勝美子

月もよしさはみつ清しこのゆふべ
なにをくひなのたえずなく蘭

秀逸（十五首）

誰か來しとたち出見れは夕月の
かけになくなる水鷄なりけり　春永己巳子

三日月のかけもほのめく淺さはの
みくさかくれに水雞なくなり　田代艶子

里川にゆふすゝみしてたゝすめは
なかるゝつきに水雞なくなり　小町谷里江子

さ苗とる人はかへりて小山田の
くれゆく月にくひななくなり　山本靜江子

端ゐしてすゝむとすれは三日月の
にほふ垣ねにくひななくなり　田島寵子

月はまたかけもにほはぬゆふ暮に
なにゝうかれて水鷄なくらむ　重松たか子

はしゐして月まちをれは我か門の
芦の葉かくれくひななくなり　香川穎子

夕つきのかけも涼しきさとかはの
水草かくれにくひななくなり　兼子織部子

夕つきのひかりほのめくさと川の　矢野うめ子

　みくさかくれに水鷄なくなり

夕まくれひとりともまつ柴の戸を　北川はな子
　れとつれかほになくゝひな哉

日はくれぬ今はととさす槇の戸を　林　艶子
　なとあけよとて叩くくひなそ

夕まくれ友はとひこてまつわれを　林　久子
　れとろかしつゝなく水鷄かな

戸さゝぬをなとか水鷄の叩くらん　廣田とめ子
　またねもやらぬゆふ暮のやと

この夕叩くは誰そといでゝ見れど　三谷起美子
　またも水鷄にはかられにけり

ひとりして月待ち居れは嬉しくも　植木とよ子
　をちの川邊にくひななくなり

（以下原稿到着順）

たそかれのけふりいふせき夕暮に　山口やす子
　いつこなるらんたゝく水鷄は

まこもかるひともかへりし夕川の　失　名
　うすきつきよになく水鷄かな

夕くれに友まち居れはそれならて　中山嘉壽子
　たゝくくひなに謀られにけり

槇の戸をさやかにてらす夕つきに　中山富子
　ひとく〳〵とくひななくなり

ゆふつき夜はのめきろめし桂川　富士村幾子
　聲もさやかにくひななくなり

夕川のまこもかくれにこゑすなり　冬木赤子
　わらはれもせてなける水鷄の

夕月のまきの戸はそにかけさして　美奈井興志子
　田つらの澤にくひななくなり

夕月にわたらまほしどさをさせは　土肥仙子
　隅田かはらにくひななくなり

そことなくたゝく水鷄の聲きけは　織田きみ子
　やかてさし入る夕月のかけ

ゑつの男からまにみつかふ夕川の　田代綾子
　流れにそひてくひななくなり

あをやきの糸魚川にゆふつきの　壺井美幾子
　かけ動かしてくひななくなり

風かよふ竹田のさとのゆふくれに　永井さい子
　すゝしさそへて水鷄なくなり

やまの端をわつかにいてし夕月の　名取正代子
　かけもさやかに水鷄なくなり

くれぬ間と人の歸れは立ちかはり　坂田きみ子
　音なふものはくひななりけり

ゆき丶する人しつまりて仄にも　失名
　たゝく水鷄のれもしろきかな

夏のひはまたさたかにも暮れなくに　竹内　賴子
　たゝく水鷄はたかやとならん

まきのとをとさしもやらぬ夕暮に　住山　幾子
　たゝくや門のくひななるらん

夕かけてたゝく水鷄にはかられて　高橋　銀子
　ほのめきそむるなつの夜の月

足ひきのやましたみつに人しれす　小町谷園子
　ゆふへすゝしく水鷄なくなり

夕くれにかとをたゝくと又きけは　長山　孝子
　かとたの面にくひななくなり

打なひくやなきのかけの夕やみに　仁保　基子
　なにをたたきてくひな啼くらん

夕つきにくひな鳴くなり槇の戸を　福原　菫子
　叩くはたそとわけてみたれは

夕まくれ人やとひしとこたふれは　諸井　貞子
　門田に來なくくひななりけり

柴の戸をいかて開かんたゝくとて　秋田　稻子
　水鷄にちきるゆふへならねは

夕月にうかれ出てつゝさゝぬ戸を　太田　貞子
　いかて水鷄のうちたゝくらむ

まらうとをしはしとゝむる黄昏に　星野かず子
　ちかひしこゑの水鷄またるゝ

ともすれは來ぬ夕暮もありけるを　星野ひと子
　れくれなからも水鷄鳴くなり

わか宿はとふ人もなくしつけさに　星野康世子
　たゝ夕くれのくひなをそまつ

暮れぬとて宿もとめにまよひけむ　綿野りき子
　さまよひなから水鷄なくなり

もの思ふわれにきけとや五月雨の　西元　豐子
　ゆふへすゞしくくひななくなり

世にうとき竹田の里のゆふくれに　西元　花子
　こゑもうれしく水鷄鳴くなり

ゆふくれに水鷄鳴くさへ涼しきを　西元とも子
　月もかと田のかはつらのさと

暮近みわかれしとものたちかへり　松岡　濱子
　叩くときけはくひななりけり

こなきさくいさゝ小川の夕まくれ
そこともみえす水鶏鳴くなり　山田　璋子

夕川のあしのわかはをてるつきに
涼しさそへてくひなゝくなり　町田　鶴子

夕されは草ははなれて行くみつの
音するかたにくひなゝくなり　吉川　貞子

夕されは芦間かくれに啼くくひな
ころもてすゝしかは添のやと　神田　久子

夕まくれ端居をしつゝかせまては
をちの川邊にくひなゝくなり　青木　繁子

文つくゑに眠る夕へのをこたりを
叩くくひなにさまされにけり　遠藤　梅子

搏ちるかはそひのゝみ日くるれは
かけはみえねと水鶏なくなり　遠藤　季子

夕されはそても涼しくれはゆなり
川邊のきしにくひなゝきつゝ　木村　兼子

夕月のひかりはいつか入りはてて
殘るはひとりくひななりけり　野田千代子

夕風のそゝくかは邊のあし間より
すゝしくきこゆくひなゝく聲　水島　良子

ゆふされは門の小川にところえて
水鶏のこゑのいともすゝしき　澤田　俊子

夕まくれ小川のはしを過きくれは
かなたの岸にくひなゝくなり　岡田奈美子

このゆふべ難波わたりに舟つけて
月待ちかてらくひなをそきく　芝田　謙子

遠近ののかはのすゑにおもしろく
きこゆるものは水鶏なりけり　西村登羅子

ゆふくれに里川つゝみこえくれは
こなたの岸にくひなゝくなり　秋園　菊子

夕まくれ水音きよきかはの邊に
何をくひなのたゝくなるらん　根岸　英子

ことさらに面白きかな夕されは
門のをかはにくひななきつゝ　秋園　露子

行く水もみえすなりぬる夕まくれ
さとの小川にくひなゝくなり　倉山　道子

夕月のかけもうつれるさとかはの
涼しききしにくひなゝくなり　中島　房子

ゆふ月のかけもはのめく小山たに
なき始めけるくひなありけり　島田　好子

川ちかふかとたの庵のほそかはに
いつか水鶏のなきそめにけり　松原常子

ほたる狩り里のわらはの聲絶えて
ちかき小川にくひななくなり　楠　精子

夕されはかとたのみつに月澄みて
聲もすゞしくくひななくなり　大島愛子

夕げたく烟りよりまつくれ初めて
門のをかはにくひななくなり　白井球子

ゆふ月のかけも涼しくれもふまて
わかやと近くくひななくなり　細井糸子

田草とる人はかへれるゆふまくれ
わかやに近くくひななくなり　神田樂子

ゆふされはしつかふせやの溝川に
涼しくみえてくひななくなり　神田都子

待つ人のかけはみえねど夕まくれ
くひなの叩く小田のふせ庵　小川金子

ゆふされは田面に沿しやとなから
たゝくくひなは何をつくらん　小川富子

夕まくれ田子の伏屋のをちこちに
すかたをかくし鳴くくひな哉　高橋信子

夕月のかけおもしろく我かやとの
なかれの水にくひななくなり　成田延子

ほのくらき夕月かけに見わたせは
こゝろありけに水鶏なくなり　溝口信子

生ひ茂る岸のやなきのしたかけに
涼しさみえてくひななくなり　溝口寛子

故郷にかへるたひ路のゆふまくれ
田川のしもにくひななくなり　櫛田よし子

夕まくれ水鶏きゝにときてみれは
河へのみちはつきそすゝしき　横田須磨子

夕まくれさすか淋しきしはのとを
叩くはたそやくひななるらん　村松みち子

ゆふつきの影しつかなる川のへに
ひとこゑたかくなくゝひな哉　西　艶子

黄昏にたゝくまに／＼いらへして
たそとわくれは水鶏なりけり　石川るゐ子

誰かきしとれもひけるかな夕まぐれ
しはのとはそをたゝく水鶏に　澤田結子

ゆふ月の影ほのくらきかとのとを
たゝくくひなの聲さやかなり　下元茂登子

まださらにあけよと叩く水鶏かな　いまとさしたるゆふくれの門　野中おさ子

はしゐしに月まつ我をとひかほに　門のをかはにくひななくなり　宮地琴子

はしゐして月まつほとに庭の池の　しはのはかられ水鶏なくなり　上野若子

夕くれに月まちをれはきこゆなり　くらきあしまにくひななく聲　白石梅子

ゆふされは夏も淋しとたち出てて　眺むるをちにくひな啼くなり　上原能夫子

こぬ人をまつはわひしきゆふ暮を　なにゝ夕鶏のおとろかすらん　春野靜江子

夕まくれ青葉にくらきまさの戸を　明けてもうつは水鶏なりけり　吾妻ちか子

黒染のゆふべ〳〵のおとつれは　水鶏ときけとうれしかりけり　諸井久良子

夕へ〳〵うつはくひなとおもへとも　人まつよひはあやまたれけり　館脇ます子

人をまつ夏のゆふへにまきの戸を　たゝくをきけは水鶏なりけり　池谷とみ子

みつかけも小くらくみゆる夕暮に　月まちをれはくひななくなり　柳田里子

夕風にまこもみたるゝかはの邊の　あたりなるらむ水鶏なくなり　田中冬子

人きぬとはかられにけり夕まくれ　まきの板戸をたゝくくひなに　福本とら子

柴の戸をたゝく水鶏のなかりせは　いかにゆふへの淋しからまし　東野けい子

ふみまなふ窓もをくらきこの夕へ　あしまかくれになく水鶏かな　武政常盤子

夕くれにさしてまもなき槇のとを　たゝく音こそくひななるらめ　小森さた子

雨はれてゆふ月うつるさとかはの　細きなかれにくひななくなり　北村孝子

くれやらて窓も鎖さぬたそかれに　なにたゝくらん庭のくひなは　北村左枝子

夕まくれとさゝぬ門をおとなふは　ねになく小田のくひななり鳧　北村てい子

夕くれに川のほとりをすきゆけは　岸のあなたにくひななくなり　仁保志麿子

かきくらし降る五月雨の夕まぐれ　近森のぶ子
人なぐさめになくくひなかな

やまぶきの花や見せまし夕まぐれ　和田八重子
雨ふるやどをたゝくくゝひなに

とふ人もまれなる庵のしをり戸を　榊原八千代子
たゝく水鶏のこゑぞさやけき

夏の日のひるねの夢をさましたは　服部かずゑ子
くれぬとたゝく水鶏なりけり

とふ人もなきわが宿のかどに來て　谷川清子
あはれにたゝく夕くひなかな

つりたれし人はかへりてゆふ月の　羽室象子
うつる小川にくひななくなり

またさゝぬ門うちたゝく人やたれ　内田くに子
明けて音せぬくひななりけり

うたゝねの夢を水鶏のいさむらん　内田菊子
ゆふ月てらすまどにとひきて

月させとまた戸をさゝぬ夕へより　小西琴子
なにを明けよとたゝくくひなぞ

くれかゝり月のさす戸を明けよとて　小西清子
たゝく水鶏のうらめしきかな

さす人もあらじとおもふ夕ぐれに　近藤ふく子
くひなは門をたゝきそめけり

今ははや門の戸とぢししつか家を　松浦てる子
たゝくくひなや月にこかるゝ

まつ宵に驚かされて出てみれは　大庭靖子
たゝかどちかく水鶏なきけり

やなぎかけしたゆく水に夕つきの　岸田はつ子
影をやどしてくひななくなり

ひとり住む淋しき宿のゆふぐれは　竹内須美子
くひなより外とふものもなし

夕へ／＼にたゝく水鶏と知りつゝも　島田悦子
ねとろかされてたちいでに鳧

夕月のほのめくころにおとつれて　岡田春子
たゝくはをちの水鶏なりけり

山かげのゆふへさびしき柴の戸に　木村きく子
くひなならては聲もきこえす

謀られぬ霄やみなれはあけまどふ　田中ゑん子
人待つ宵はのきのくひなに

くれなはと誓ひし友にあらずして　牧山きよ子
たゝくは庭のくひななりけり

夕毎にたゝくくひなの知りつゝも　伊藤清子
なほはかられぬ人やかへると

淋しさのまさる夕へはおのづから　佐藤誠子
叩くくひなにはかられにけり

夕すゝみくらさはましぬ今はとて　林常子
歸らんとすれど水鷄なくなり

夕がたにをちの川邊にこゑすなり　輕部壽子
みくさかくれの水鷄なるらん

夕つきのかけもすゞしき川のへに　赤羽若枝子
なにを水鷄のこゝくなるらん

打しめり軒端いふせくくれゆきて　和田不二子
ゆふへ寂しくくひななくなり

雨晴れし田川のなかれとめくれは　和田秀子
涼しきつきにくひななくなり

待ちわびてひとり文よむ夕へには　水上仲子
たゝく水鷄も友かとぞ聞く

夕月のかけれもしろくさすやとに　水上千代子
いつこおけよとたゝく水鷄ゟ

いく度かはかられけりな夕すゝみ　草野賤枝子
友まつかどをたゝくくひなに

くるゝをも知らではたらく里人に　石川すけ子
夕をしらせてなくくひなかな

こなき咲く田川の岸のゆふまくれ　石川とく子
くひなゝくこゑ淋しかりけり

小山田のおせちをたどる夕くれは　大谷津こと子
をちのくひなの聲ぞ淋しき

夕されは里のわらへもかへりくる　中桐杏子
田川のすゑにくひななくなり

かやり火の烟りいふせき夕まくれ　戸塚てつ子
門をたゝくはくひななりけり

友や來といつれはさゝぬ槙の戸を　竹村貞子
叩くゆふへのくひななりけり

五月廿日兼題　蛙を聞く

天　福岡縣筑紫郡下蓆田村　吉村ふて子

大かたの木すゑ青葉になりゆけど、なほちりのこる花もやおると、同し心の友どち、をき山へをさまよひありくに、ふと淸き谷川のほとりにいてぬ。岸には山吹の花さきみたれたるか、をり〳〵谷川にさそ

はれて、こかねの雪とちりかふもあはれなるに、蛙のいとすゞしきこゑになきたてたるいとおもしろし。日ころきかまほしかりしに、けふはまして春をゝしみかほなるも、をりにあひて、いはんかたなくあはれなりや。

山吹のちりてたゞよふ川くまに
はるをとゞめてなく蛙かな

横濱宮川町三丁目三十四番地　松岡濱子

地

賤がなはしろに、水せきいれてより、なきいづるその聲は、花になくうぐひす、草葉にすだく虫の音のごとく、やさしう妙なるにはあらねど、あやしくあはれにおぼえて、水にすむ蛙といひけん古言さへ、實にもとおもひ出る心地こそすれ、まいて賤がうたふ田うたの聲はてゝ、田の面ふぐろらくなり行く頃より、夜深くなるまに〱、小やみなくなきしきりたるは、あはれも一しほにまさりて、そゞろ心も遠くなり行く心地せられてなん。

筑前國嘉穗郡飯塚　林久子

人

ふりつゞきしあめは、やう〱はれたれど、遠近の花は、はかなくなりうせて、あとかたもなくえ、たずとひ來し人さへ、今は見えずなりて、さびしさいはんかたなし、ひとり家にこもり居らんもわびしけれど、かどの小川のほとりをそゞろありきするに、水上遠く蛙のなきいでたるも、友なきをりなれど、われをよぶこゝちのせられていとうれし。こゑをしるべにとめゆけど、此處かしこ、水のよどみに二ひら三ひら花のうかびたるわたりに聲清らなきゝそへるが、一しほあはれにおぼえて、ひとりきくがいとあたらしきこゝちしてなん。

筑前國警固村藥院　東野けい子

人

折にあへど是もさすがに哀なりと、古人の言の葉はまことなりけり。さいつ頃、市中のちりをさけて、この山里に家居移してより、折〱のあはれも一入に覺えぬ、けふもいと物淋しくて、近き小川のきしの草ふみ分けつゝ、たゞ一人そゞろありきするに、むかひに見ゆる山寺の鐘のこゑの聞えくるも、いと哀なる夕つ方、こゝかしこに友よびかはす蛙のこゑ〲、折からいとをかしう、かのふる歌もおもひ出られぬ。

夕まくれそゝろありきの淋しきに
小川のすゑに鳴く蛙かな

（以下原稿到着順）

山口やす子

長閑なる春の景色は、はや昨日の夢となり、數日の長雨に水漲り、早苗なども青々と繁りしが、田毎の蛙幾百千とも數も知られず、聲すさまじく鳴くさまは、千軍萬馬の襲ひ來るかとも疑はれ、かまびすしきことといはんかたなき程なれども、何かに恨の數つもりて鳴くものならんと云はれし人の言の葉を思へば、亦憐にも聞ゆるなり、又或人は春の別れを惜みてならんと云はれしが、若し眞に然りとすれど、蛙にもみやび心のありと謂ふべきか、要するに、斯まで鳴くは何かの理あることならんと、昔しの人もさまゞゝに評しあへるが、今に至りて確なることも分かず、紀の貫之は、水にすむ蛙も歌を讀むなど云はれしこともあれど、人に依ては面白き聲に聞ゆるなるべし、うしと聞き面白と聞くも、聞く其人の心にこそあれ、今の世に蛙の聲をもて歌なりと思ふ人ありや、蛙の知已を得る、實に難きことなるべし、其難きをもて、今猶は高き聲を擧げて鳴き喋くを聞は、あやしからんや。

井澤たを子

春のゝどけさもいやましにまして、なんとなう心地よげになむ、四方の眺も青々と、若緑なす萌芽の香りは、いとみじう數多の人の心をゆたかに、つねゞゝのつらきつとめもこれらの木の芽の下に呻吟ひて、さわやかなる心地にこそなるべけれ、げに春は人の心の浮き立つものにこそ、鳥虫に至るも、生あるもの、などか心の浮かざるべき、おのが郷里の住家なる右のつらに、いと眞廣の田の面あるに、水のなかゝゝにつきける、見るさへいみじうおもしろく、さゞ波のきらめく間に、稻根のまだらに見ゆるも、またことなうをかし、數多の蛙は、年毎にこの田にいとうれしげに集ひ合ひて、ほがらかなる聲もて鳴き立つるを、獨り机に向ひて文讀み居つるも、いつしか心もうぞゝれて、徐ろに田の畦に出で行くもいとをかし、さはれ、今は都に物學びする身にあれど、このたのしみにはね合ひがたきにやと、朝な夕なの物思ひなるを、昨日おのが今住家なる右手の堤の下に

て、鳴き出づる蛙のこゑにそゝのかされ、郷里なる田の畦をさまよひ、くさぐさの歌のまねびなどしけるを思ひ出で、そゝろに郷里のなつかしく、出で立ちて鳴く蛙のかたはらに至るに、聲ころかはらざらめ、色などのいといたう異なるに、いかでか思ひの外ならざらむ、さこそはたかはざらましを、生れつきなる色とは云へ、また水と陸とに住める違ひにやあらむなど、獨りつぶやきつゝ、おのが住家にかへりぬ、蛙の初聲を聞き、故郷のいとなつかしう思ふなどげにゆかしきものにこそ。

村松みち子

名にし負ふ大和にしきの花衣もいつしかに日かずふる五月雨のいとしめやかになりぬれど小田近ういはしめぬれど、また都に覺えぬたのしさは、田の面の早苗、五月雨のつゆに、いとゞみどりのいろふかく生ひしげりたるさまをながむれど、何となうこゝろすか〳〵しうればえて、古田の蛙は、時を得がほに、こよ〳〵と啼きすさびて、夜ふかうなりぬれど、ろの聲のいとすさましう、みそらにもかくなけるにやなどと思ひまどゐるも、いとをかし、たゞよなく〳〵蛙のこゑのみきゝてゆめもむすばであかしぬることどのいとをかしさに、都なる友にもとくきかせまほしうて、蛙ならねど、こよ〳〵とかくなむ。

春野靜江子

三日月の影細やかに、おぼろなる空の景色いと淋しきを、雲のゆきゝはけしけれど、雨やふるらん、あたらさかりの花を、夜半に散すことの惜しさよなど、思ひなげゝは、同じこゝろになくならん、池の蛙の、いと折はへてうたふに、をりからいとあはれにて、暫し庭の面をながめぬ。

森野芳枝子

心なき身にも、哀や覺えけん、朧月夜の影かすかに、春雨のしと〳〵とふるに、蛙の池の邊に鳴けり、學の窓の燈火くらく、昔の文などあさりて、やゝうみたる折とて、まことにのどかに哀にればえて、きゝいるに、節つけてうたふ聲の、ます〳〵高く、姿のいかばかり美しうやなど、思ひやるこそれかしけれ。

北村貞子

山は若葉たひ茂り、野は百草もえ出でゝ、すぎし花についてなかめよききのふ今日、近き田中に蛙の聲

しきりなるに、をかしき姿を見てきかんと、妹等打つれ、細きあせ道たどり行くに、鳴く聲もいよ〳〵かしましく「手をついて御經申する蛙かな」の句も思ひあたりて、をかしき事になん、やかて足音をきゝ付てか、俄に聲のとだえたるに、又もやとなりの友の聲につれて、なき出すさま、さすがに哀れを催せど、いそぎ元きし道に引かへしぬ。

名取正代子

やう〳〵春ふかうなるまゝに、をちこちの花もいつしか若葉見えそめ、ちりたる花のこゝかしこにしがらみかけし田川には、いとも匂ひやかに蛙なくなる聲きこゆ、あなたのもしくもなく物かな、花になく鶯、水にすむ蛙の聲、いづれ歌ならざるはなしと、むかしつ人もいへり、これのも〳〵我爲の春をたのしむ聲なるべし、いかで我身もいつかかゝるたのしき春にあふべしなど、折にふれつゝ、しかすかにおはれにればへてしむしきゝすましたるに、今朝より深かりつる霞の、とけもえやらず、花ぐもりにもあらで、やがて雨のふりいでぬべくかきくもり來つるに、いよ〳〵蛙の聲はかしましきまで立ちしきりてなん。

小西こと子

早苗田の水波靜かにして、拭ふが如き大空に、十日の月さへ照り渡り、遠くもあらぬ谷川の流れ、斷れんとしてはまた續く音の、琴の調へにもやあらんと、あやしまれけるに、こゝのもかしこのも、いひ合せたらんやうに、ころひ聲して謳ふ蛙の、ふしも面白く、山吹の花影か、石井の底か、れのが住めるところを、黄金の家とも、玉のうてなとも思ひて、たのしくうたふにやあるらん、哀れさゝやかなる虫さへも、身にふさはしき樂みはあるものを、聖の御代に逢へる身の、なぞ樂しみのなからんや、春の花秋の月、さてはまた冬の雪までも、いづれ樂しみの種ならぬはあらじ、さはれ、今はわが宿と遠くもあらぬ小山田に、君が代祝ふ蛙をぞ、文よむ窓の友として、心を慰めつゝあるを、蛙もその心得たらんやうに、一入こゑ高く謡ふもをかし、

我宿とほど遠からぬ小山田を
となりがほにもなく蛙かな

兼子織部子

けふもまた、降りくらしつるに、かくては、疏り苗

りし花の、はやもちりなん、野邊の小草いかに生ひしげるらんなど、思ひやりつつをるに、窓うつ軒のしづく、音とだえにければ、晴れにけりと、いとうれしく、草葉の露にそぼちつつ、小田の畦づたひに、そぞろありきすれど、空はなほ打けぶり、霞こめたるに、夕月の影はのかにてらして、野中の小川水まさり、汀にさける櫻の、風もなきに、ほろ〳〵と、散りかかりたるを、うしとてや、蛙の音にたてて、すだきいでたる、折柄いとあはれに、をかしうも、はたかなしくて、立ちさりがたき草のもとになん。

岸田はつ子

此の一もとはど、いひをしへし風は、心なくさそひゆきしに、ちりての後は、したしき友だに、音つれねど、つれづれのあまり、くれゆく春のけしきの、尋ねまほしうなりて、ただ一人、小草分けつつ、小田の畦道そぞのありけは、青青と時めきたる柳の間をぬひてながるる野川には、汀の山吹さきみだれたり、空は霞こめたるに、紫の雲はるかにかかりたり、いとゆかしければ、流にそひてのぼりぬるに、向ひの岸に生ひ茂れる松の梢に、咲ける藤ありけり、底まで匂ふ浪間を、水のまに〳〵山櫻の二ひら三ひら流れくるに、さては深山の奥さへ、春はつきなんと思ふに、蛙の音に立てて、あまたなきいでたることよ、折からあはれにも、はた心ありげなるに、我身もやかてうつろひなんに、かくいたつらに、遊ひくらさんやは、いざ歸らんと思ふものから、なほ立ちさりかたきけしきになん。

黒瀬すゑ子

今日はゆふげも例より早うをへぬ、此まゝ家にてもらんも本意ならねど、幼き妹一人を伴ひ、いづこともさすかたもなくて、我家をたちいでつ、やゝ歩をすゝむるほどに、人のいへも次第にまどらになりもてゆき、小田の蛙のなく音さへきこゆ、あはれ此蛙の聲、もゝちたび聞けどもあかぬものを、今日ゆくりなくもきくことのうれしさよ、さるにても、此蛙をみて、たふとき志を起しゝ古へ人のことゞも、そゞろにむねに浮みて、いよゝゆかしけれど、妹にも此古こと語りさとせど、幼きながらも、いと感じたる體なるもうれし、やがて入相のかねにうながされ、家路をさしてたどる程に、やうやく其聲の遠ざかり

ゆくぞ、なごりをしや。

岡田春子

はや日はくれなんとして、あたりはうすぐらく、木々の青葉は、やうやくひかりなうなりゆきて、もゝ千鳥のこゑさへ、きこゑずなれる夕つ方のけしき、一しほと思はるゝころより、ゆかしき聲音にてなきそむる、そのあいらしさ、得も云はれず、これやかのかへるなるらん、此ものや、其形いみじう小さけれど、そのなくねのよきこと云はん方なく、又古人の學びのみちの友となりし事ども、そゞろにおもひ出でられてなむ、かくするうち、日はまたく、くれはてゝ、夕月のかげのほのめきわたるも、またゆかしけれど、ともしびてらしつ、彼のうるはしきなくねと、そのいさををめでゝ、文つゞることとかくなむ。

佐藤操子

はや葉櫻の世となりて、花は一夜の夢と消ゑ、何となう氣もうつ／＼として樂しからず、折から都はなれし叔母の許より、田舍も漸／＼初夏の景色を装ひたれど、一夜泊りにこよとのたよりありたれど、是れ幸ひと、土曜日の午后三時の汽車にて、妹つれたちて出立ちぬ、斯くて夕つ方の五時と云へるに、叔母の家には着きにけり。叔母もかひ／＼しく吾等を迎へ、何くれとなくもてなされ、相語りつゝ、夕げを濟し、月を眺めんとて椽に出づれど、池なる蛙の鳴きそめて、數多の聲々は、皆節を合する如くなれど、いと珍らしく、又床しく、かゝるものは、都などの雜踏の土地に住みては、きかれざる事なれど、知らず／＼夜を更しぬ、翌くる日は、野邊の景色をたどり、叔母に暇をつげて、都にもどりけり。されどかの蛙の聲は尙耳にあるが如くなれど、茲に其の一事を綴るになん。

岡崎一子

一と夜書をひもときて、ゆくりなく讀み行くに、くりかへす數も重なりて、初更を過ぎぬ、折しも庭面にて鳴きそむる蛙の聲の、耳にそばだつに、氣附きければ、戸を推して椽に立ちいでけり、月はみそらにてりかゞやき、池には蛙の調子そろへて謡ふあり、嗚呼小蟲すら情あり、是れ一族相集りて、月を樂しむにやあらむ、今妾には、父母あり兄弟姉妹あり、されど父は公事にて遠くはなれ、兄は遙かに都に遊

び居れど、一家團欒、月わきらかなる夜、相語り相詠じ相和し、父母の膝下にはべりて、父母の笑顔を拜するを得べきか、感はいよ〳〵ふかく、堪へ兼たるまゝに、蛙を聞くの文をつゝることとかくなん。

安井うめ子

今宵は例の文机に向ひて、古人の書きれかれし文どもひもときぬ、燈火の影に暗けれど、かきたて〳〵讀みゆくに、世の女子のよむべき道のふし〳〵、いと細かに、水莖のあとも淸らかに書き流されたり、かむかり道といふ事を重じ給ひし人は、いかに正しき行ありける、此御敎への百が一つをも盡しえぬわが身の程のいとゞあさましと、打かこつ折しも、虫の音いと滋う、時計の音もいとすみて、聞ゆるからに、夜もいたく更けぬらんと覺えて、左右を窺へど、家人は皆靜まりぬ、いざ我も寢なんと、取ちらしたる書などをさめなどする折しもあれ、軒の松風につれて、哀れに妙なる蛙の鳴く聲のきこえければ、そゞろ床しくて、やをら庭にれり立ち、なほも耳をかたむけ聞くほどに、鳴く音愈々すみ勝りて、いとゞ身にしみて覺えぬ、あはれ〳〵ゆめの間に、彌生の空も昨日今日と過ぎ行きて、花は靑葉とうつりかはりたるかな、れもひめぐらせど、世はかくよどみなくかはり行くものを、吾のみは同じ業のみくり返し、進むべうも思はれず、あはれいつの世にか此かぎりなき學びの林をわけつくすべき、げに蛙にも恥かしき心地のせられけるよ、古へ小野道風とかいふ人は、蛙のいさをにいたく感じ給ひしとよ、此れ蛙よ、汝はいさを正しき僕なるぞよ、ます〳〵つとめはげみて古へにも勝り行かんこそ願はしき、妾も是よりは、愚ながらに何業にまれれこたりなく、心にいれて勤めたらんには、竟には一つゆゑづけてなのめにえいづるふしもなどかはなからんと、あいな頼みにかゝりてなん。

廣田とめ子

日數降り暮しゝ、春のなかめも、晴れ渡りければ、獨りたれこめんも、うきわさになん、されば、たまあへる、友をそゝのかし、ある川のほとりをとはゞ、露おきそはる、岸の山吹の、いはぬ色に、匂へるもなつかしく、ことに、一瀨もよきすきように、なきわたる蛙の聲こそ、をかしけれ、こゝのは聲ひくし、か

しこのはこまやかなり、など、打かたらふそ、こゝちよけなる。かくひまなくなけるは、なれど暮れ行く春を、をしむならんと思へは、其聲もいと〳〵あはれになん。

なかれ行く春の日かずをとめかねて
川のうき瀬に蛙なくらん

服部　かつみ子

片山里の家居淋しく、門田もろこかしこにそゝろありきゝつゝ、くれ行く春の名殘を惜しめは、昨日けふ賤の男か水せき入れしなは代小田の、彼方此方に、早や住みなれてなく蛙の聲、いとかしまし、折りから、しめやかに降りくる夕雨に、あらりの栞花の散り亂れて、水にうかふを、山吹の花とや見けん、一きは聲高うなくも可笑し、あまりのかしましさに、いと耳煩はしき心地そする、世に用なき事に、かしましきを蛙鳴蟬噪と云ふなにもけにや、されど物思ふ夕ぐれ、淋しくなく聲はいと床しく、さてはうつろふ山吹の花を惜みてなく聲をきゝては、また中にも捨てかたき心地せられてなん。

三谷起美子

惜みし花も名殘なう散りゆきて、心やるべき方なき夕つ方、後の小田のほとりに立ち出でゝながむれぞ、空のけしきもいと物さびしきに、かしがましきまで、かしこにもこゝにもなき立てたる蛙の聲は、ひなに住みなれしれのが身にも、いと物新しうあはれにきこゆるに、柳の枝に三度までつとめてやう〳〵飛びのぼりきといふ、いにしへの事さへ思ひいでられて、いよ〳〵あはれさまさりゆく折しも、けしきむかり降り出でたる雨の、ひやゝかに面をうてむ、俳せいは の中に走り入りぬ。



今樣

唱歌

文

國光社編輯局譯

獨逸讀本抄譯

近刊

全一冊　定價金拾八錢

國情を異にする教育主義は漫然摸倣すべからず只方法に關する者は資て**玉を琢く料**に供するを妨けず獨逸は國民教育を最も厲行し教育の最も普及せる國なれは獨逸讀本を譯述して**彼を知**らしめんこと必要なりとて熱心忠實なる教育者諸君より促れしこと一再にして止まらず本社も亦多年斯道を以て自ら任ずる者なり豈に**他山の石**たるを期せさらん依て彼の國最近刊行の讀本を涉獵し**事實の撰擇新奇にして却て實際を離れす文章流暢にして趣味に富**める者に付き**粹を拔き精を撰ひ**勉めて原文の眞義を發揮し以て本書を得たりし者なれは教育者諸君之を得は**座右の好參考**に供すべく學生諸君之を得は**朝夕の好伴侶**となすへく**彼の國教育の實質を窺知するに於て百千部の教育說心理論に優れること萬々なり**

東京京橋區築地二丁目二十一番地

（電話番號本局八八）

發行所　國光社

女鑑第百三十二號目錄

（明治二十四年八月八日內務省許可）
（明治廿五年三月十二日遞信省認可）

社告

○代價は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御拂込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御добав附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊（三ヶ月分）	十二冊（半年分）	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治三十年五月十九日印刷
同　年五月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　川崎直衛

東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人　並木直雄

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行所（電話番號本局八八）　國光社

（印刷所　東京國光社印刷部）